

訂改  
帝國讀本  
卷三

3159  
Ma7  
資料室

41713

教科書文庫

4
810
41-1918
200030 2050

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

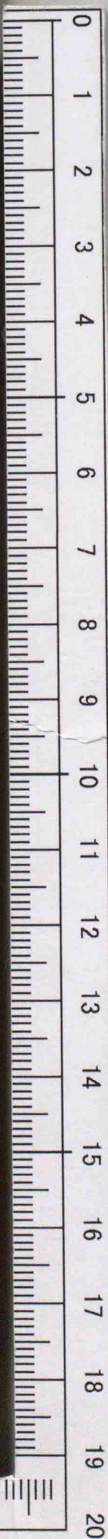


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Ha7.

日六十月二十年七正大  
濟定檢省部文

文學博士芳賀矢一編

訂改  
**帝國讀本**



東京  
合資  
會社  
富山房  
發兌



訂改帝國讀本卷三目次

一	神代其一	一
二	神代其二	六
三	大日本國(韻文)	三
四	櫻	四
五	勿來關	一八
六	舟路(韻文)	二
七	潮の岬(口語文)	三
八	無線電信を待ちつゝ(書簡文)	二七
九	トラファルガルの海戦 其一	三五

目次

一〇	トラファルガルの海戦 其の二	四二
一一	少ピット(口語文)	四七
一二	初夏の感	五四
一三	平和の家(口語文)	五二
一四	詩的農園	五九
一五	桶狭間の戦 其の一	六五
一六	桶狭間の戦 其の二	七一
一七	豊太閤	七九
一八	史傳を讀むべし(書簡文)	八六
一九	夏の夜(韻文)	九二
二〇	橘少佐 其の一(口語文)	九四
二一	橘少佐 其の二(口語文)	九七

三	我が暑中休暇(口語文)	一〇三
三	風と露(口語文)	一〇六
三	歐洲の初航海	一一一
三	日本海の夕浪と北海の朝潮(口語文)	一二七
三	學藝に志す者の訓	一三三
三	松坂の一夜(口語文)	一三五
三	人倫の歌(韻文)	一三四
三	ナイヤガラの壯觀(口語文)	一三六
三	亞米利加人	一四一
自讀文		
一	早春の曲(韻文)	一四九

- 二 生存競争（口語文）……………一五〇
- 三 樂翁公の少時……………一五三
- 四 僕の故郷（口語文）……………一五七
- 五 曾呂利新左衛門……………一六〇
- 六 古代の朝鮮と日本人（口語文）……………一六三
- 七 箱根神社祈願の記……………一六五

卷三目次終



改訂帝國讀本卷三

一 神代其の一

人類に歴史ありてより幾千年、我が國史の神代に始れるは、たまく、以て、我が國の世界の舊邦たるを證明する所以なり。

天地開闢の初、高天原に生れ出で給へる神は、天御中主神、次に高御產靈神、次に神皇產靈神、此の三神は萬物造化の神なり。次に國土未だ成らずして、浮脂の

造化

如く漂へる中に、葦の芽の萌出づるに似たるものあり。之により生れ給へる神は、可美葦芽彦舅神、天常立神、次に浮脂の如き物より生れ給へる神は、國常立神、豊斟淳神、以上の七神は獨神にして、御身を隠し給へりといへり。次に男女の神相次ぎて生れ給ふこと五代、五代目の男神を伊弉諾神、女神を伊弉册神と申す。諸の天神、此の二神に詔して、「此の浮び漂へる國を固め成せ」と宣ふ。二神乃ち天瓊矛を持ちて、天の浮橋の上に立ち、瓊矛をさし下して探り給ふに、矛の先より滴る潮凝りて島と成れり。これ礮馭盧島なり。二神こゝに於て其の島に降り、八尋殿を建て、住み給ひ、

大八洲國

それより國土及び神々を生成し給ふ。まづ淡路島、次に四國の島、次に隱岐の島、次に筑紫の島、次に壹岐の島、次に對馬の島、次に佐渡の島、次に大倭、豊秋、津島、即ち本州なり。まづ此の八島を生成し給へれば、日本國の古名を大八洲國と稱ふ。其の他尙小さき島々を生成し給へり。かく國土を生成し終へて後、風の神、海之神、山の神、木の神、野の神等を次々に生成し給ふ。

大八洲及び山川草木已に成りたれば、此の度は天下の主たるものを生成せんとて、日の神を生成し給ふ。御名は大日靈貴、又天照大神と申す。次には月の神、御名は月夜見、次には素盞鳴神なり。二神かくて、天照

神去る

大神には高天原を治めよ、月夜見神には夜の國を治めよ、素盞鳴神には海の國を治めよと教へ給ひぬ。伊弉册神最後に火の神を生成し給ひて神去りましぬ。伊弉諾神はこれを歎きて、女神のいます黄泉國まで到り給ひしが、やがて歸り來て、汚き國に行きたれば、禊して穢を清めんと宣ひて、筑紫の橘の小門の檍原に於て、御身を洗ひ清め給ふ。此の時、御衣、御帶、御珠等解棄て給へる物よりして成出で給へる神々を、始め、數多の神々自ら成出で給ふ。

禊

さすらふ

さる程に、素盞鳴神性勇悍にして、粗暴のふるまひ多かりしかば、父の神の怒に觸れて、遠き國へさすら

汚き心

たばさむ

ひ給はんとす。よりて一度姉大神に暇乞せんものと、高天原さして上り給ふに、山川國土悉く震動す。大神驚き給ひて、弟の神汚き心ありて我が國を奪ふならん。と宣ひて、弓矢をたばさみて待ち給ふ。素盞鳴神上り來て、邪心無き由を申し給ひ、二神相盟ひて、大神は素盞鳴神の佩び給へる十握劍を取り給ひ、素盞鳴神は大神の持ち給へる御統玉を乞受け給ひて、いづれも天の眞名井の水にふりすゝぎて、嚼碎きて吹き給ふ。其の霧の中より多くの神々成出で給へり。御劍の霧の中よりは女神三柱、御珠の霧よりは男神五柱なり。此の男神の第一を天忍穗耳神と申す。大神喜びて、

あはなち  
みぞうめ  
しちよめ

「こは我が物より生れ出でたれば我が子なり」と宣ふ。かくて大神の御心は和ぎたれど、素盞鳴神の荒びたる行は尙やまず、大神の御田に畔放ち、溝埋め、重播など、さまざまの悪事を爲して農業を妨げ給ひ、或時は、新嘗の御殿に糞まり散らし、又齋機殿に生きたる馬を逆剝にして、投入れ給へり。恩愛慈仁の徳に富ませ給へる大神も、今こそ其の亂行に堪へかねさせ給ひて、天岩戸にこもり給ひしなれ。素盞鳴神は此の罪によりて、高天原を逐はれ給ひぬ。

二 神代 其の二

(仁多郡船通山  
湖に發し、尖道  
湖に入る)

素盞鳴尊は出雲の簸の川上に至りて、足摩乳、手摩乳といふ老夫婦に逢ひ給ひ、其の請によりて、八岐の大蛇を退治し給ふ。さて老夫婦が八人の娘の中、唯一人残れる櫛稻田姫を妃として、須賀といふ處に宮造りして住み給ひ、御子、御孫、次第に榮えたり。

其の六代目の御孫を大國主神といふ。大己貴神、八千矛神などいふ別名もあり、稻葉の白兔を助け給ひし神なり。幼き時は種々の困難に逢ひ給ひしが、御行正しく、御徳高かりしかば、心悪しき兄神達も次第に服し奉りて、よく出雲地方を治め給へり。其の後少彦名神と心を合せて、尙國土の經營に努め給ひ、醫藥の

國土の經營

豊葦原の瑞穂國

道をさへ教へ給へり。

高天原なる天照大神は、豊葦原の瑞穂の國は、我が子孫の君たるべき國なり」と宣ひて、御子天忍穗耳神を下し給はんとす。されども國中未だ神命に従はざる者多かりければ、まづ天の穗日神をして、大國主神に其の旨を傳へしめ給ふ。穗日神三年まで復命せず、よりて更に天稚彦を遣はし給ひしが、これはた八年に至るまで復命せざりき。是に於て武甕槌神を遣はして下らしめ給ふ。大國主神、長子事代主神と謀りて、「畏し。此の國は御子に奉らん」と答ふ。次子の建御名方神は服する色無く、信濃國諏訪に逃げのびしが、そこ

復命

はた

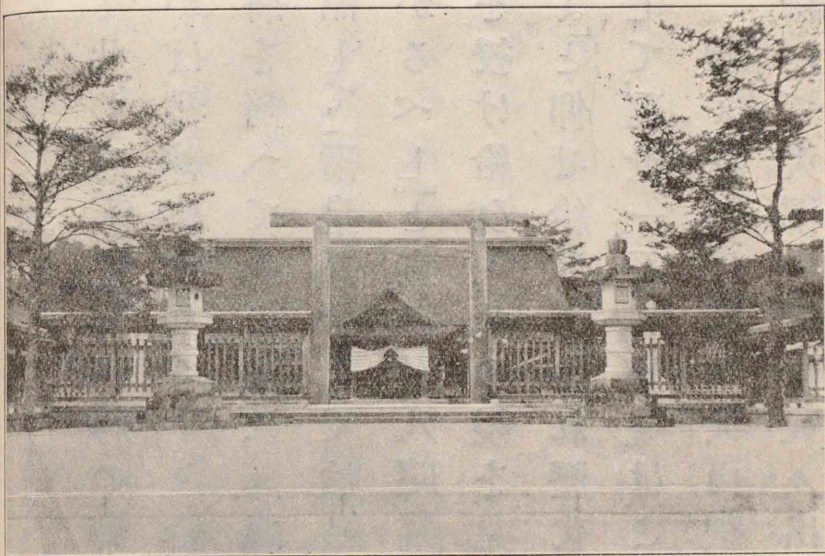
にて遂に屈服せり。

此の時天忍穗耳神の御子に、瓊々杵神生れ給ひしかば、父神に代りて下り給ふ事となり、多くの文臣武將を隨へて、此の國に降臨し給ふ。此の時天照大神は詔して、「爾皇孫行きて治めよ。寶祚の榮は天壤と窮無かるべし」と宣ひ、又八咫鏡と、叢雲劔と、八阪瓊曲玉とを授け給ひて、「此の鏡を見ること、我を見るが如くせよ」と仰せ給ひき。これ歴代傳へ給へる三種の神器にして、萬世一系の皇統は、こゝに其の基を開けるなり。瓊々杵神は國神大山祇神の女木花開耶姬を娶り給ひて、火闌降神、彥火々出見神等を産み給ふ。彥火々

寶祚の榮は天壤と窮無かるべし

此の鏡を見ること、我を見るが如くせよ





出見神は海神の宮に行  
 き給ひし神なり。海神の  
 女豊玉姫を娶り給ひて、  
 其の皇子に鷓鴣草茸不  
 合神あり。鷓鴣草茸不  
 神の第四の御子は、即ち  
 神武天皇なり。天孫降臨  
 宮より四代まで日向に都  
 し給ひしが、神武天皇御  
 年四十五にして東征の  
 途に上り給ひ、大和地方

の賊を平けて、始めて橿原に即位の式を挙げ給ふ。之  
 を我が國の紀元第一年とす。

傳唱

明確を失ふ

信念

歴史眼

特色

殘虐暴戻

思ふに、上代には文字無ければ、世々傳唱の久しき、  
 史傳の明確を失ふもの多く、天地開闢の説明、神祇崇  
 敬の信念も交れるを以て、今の歴史眼を以て神代の  
 事實を知らん事は難し。但し之を他人種の開闢史に  
 比して、我が國土が皇祖諸神と同じく、伊弉諾、伊弉册  
 二神の御子たることは、國土と皇室と相離れざる信  
 念を示すものとして、我が神代史の一特色といふべ  
 し。他人種の神話には、往々殘虐暴戻の神多きに、我が  
 神々の溫和慈仁の徳に富ませ給へるを見ても、我が

君臣の分  
上下の誼

國體の淵源

(一)江戸時代の國學者村田春海。春道の子。賀茂真淵の門人。文化八年(一四七二)四月六日歿。年六十六。

國民性の一端を知るべし。總じて平和の神話にして、君臣の分早くより定まり、上下の誼親子に等しき所以も、之によりて窺ふべく、祖先を尊奉して、萬世動かざる國體の淵源も、之によりて知るを得べきなり。

天地の神やかためし萬世に

たて、動かぬ國の御柱 (一) 平春海

三 大日本國

御祖の神の産ませし國に、  
皇孫降りて君とし知らず。  
寶祚は天地と窮あらず。

此の國、此の君、世に類なし。

とほに

大君、民を子の如おぼし、  
國民、君をば親とし慕ふ。  
さながら一家の睦はとほに。  
此の君、此の民、世に類なし。

鎮の山  
神さぶ

大和の國の鎮の山と、  
富士の嶺み空に神さび立てり。  
貴き皇國の姿を見せて  
高きは此の山、世に類なし。

雄けだかく  
雄しき國ぶ  
り

日出づる國の  
しるしの花と  
櫻は霞に  
まがひて咲けり。  
けだかく、雄々しき  
國ぶり見せて  
句ふは此の花、  
世に類なし。

四 櫻

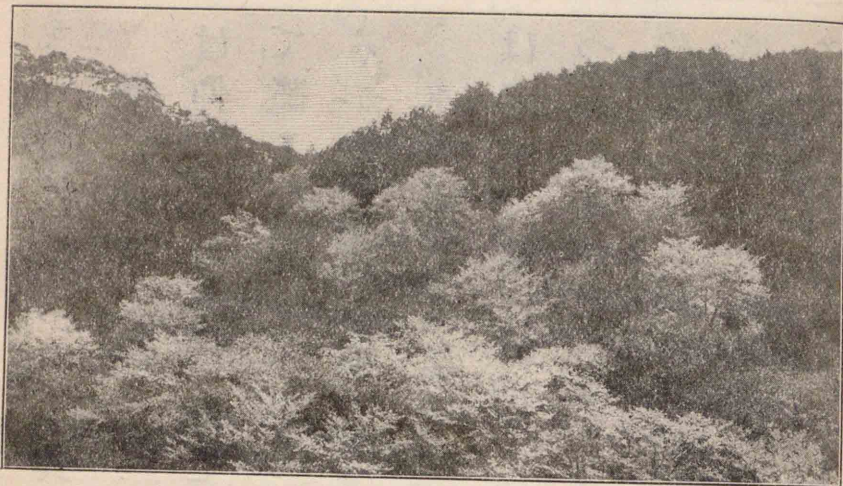
幸田露伴

磯山

櫻は春の魂なり。  
櫻は邦の句なり。  
櫻はたゞ一本咲けるもよし。深山の岩蔭などに、何  
知らぬさまして咲ける、或は磯山の茂れる雑木の間

紛れぬ色

雲と連り霞  
と蒸す



吉野山の櫻

などに、ちらりと紛れぬ色を  
見せたる、あはれも淺からず  
思はる。

櫻は幾本となく繁り合ひ  
て咲けるもよし。狭き路を蔽  
ひて、右より、左より、枝をさし  
かけ、花瓣を相おしつけて咲  
ける、或は遠山長溪、雲と連り  
霞と蒸せるを打見たる、皆め  
でたし。菊などはいと好き花  
なれど、遠く眺め廣く見るべ

風情

きものにはあらず。其の趣甚だ違へり。  
 櫻は仰ぎて瞻るもよく、俯して瞰るもよし。餘の花  
 は、仰ぎて瞻るに宜しきは俯して瞰るに悪しく、俯し  
 て瞰るに悪しからぬは仰ぎて瞻るにをかしからざ  
 るが多し。花の徳すぐれたりとやいはん。  
 水に臨める櫻、花の上漕ぐ風情殊におもしろし。梅  
 は老いて水に肘つくがよろしく、櫻は嫩くて花うな  
 づかんとするがうるはし。池にも、流水にも、それごと  
 佳趣あれど、流水に臨める特に佳なり。大江に花の一  
 吹雪亂るゝなど、誰かは又之ををかしからずといは  
 ん。藤の花、山吹の花も、水にうつりよろしけれど、櫻の

趣は高し。

近くも遠くも、多きも少きも、雨にも晴にも、朝にも  
 晝にも夜にも、風にも曇にも、水邊にも山路にも、市に  
 も野にも、谷にも磯にも、狭きにも廣きにも、茶にも酒  
 にも、行くとして可ならざる無き、これ櫻の徳なり。他  
 の花も皆一ふしありて、佳ならざるにあらず。たゞ其  
 の徳に於ては櫻に譲ること多し。

櫻櫻

櫻は春の魂なりとやいはん。邦の匂なりとやいは  
 ん。

— 悦 樂 —

行くとして  
可ならざる  
無し  
一ふしあり

五 勿來關

熊田 葦城

武衡(一)既に縛に就き、家衡(二)誅に伏し、與黨亦斬に處せらる。義家出羽を治むること十年、國內靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草馬蹄輕し。客心悠々亦戰時の秋に似ず。行きく(三)て勿來關に差掛る。山上模糊として白きは雲か、地上續紛として翻るは雪か。雲と見えしは梢の花、雪と思ひしは散來る櫻。關山春深き所、心無き身も感などか起らざらん。兵馬倥傯の間(四)に在りては、月を觀ても樂しからず、鳥を聽くも嬉

(一)清原氏、出羽の豪傑。寛治元年(一一七四)源義家に捕へられて殺さる。  
(二)清原武衡の甥。寛治元年義家に殺さる。  
(三)常陸、磐城の國境。  
(四)兵馬倥傯

兵馬倥傯

襟懷

逸興

一かへり二かへり口吟む

長亭短驛

門前市を成す

しからじ。今や干戈既に戢りて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、冑も花、甲も花、身は何時しか畫中の人となる。逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。吹く風をなこそその關と思へども

みちもせに散る山ざくらかな  
一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするをも知らず。

かくて長亭短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ねて一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語る。陸奥は名所多き國と聞く。年久しく彼

の地に在りつれば、皆それぐに見候ひなん、是のみこそ羨しき心地すれ」と。義家畏りつゝ答ふ、「心長閑けく候はんには、床しきことも候べけれど、軍に暇無き身には、優しき詠とても候はず。唯勿來關と申す所に、花の散る様の餘りに興深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしが、其の儘に打過ぎなんも口惜しく、をこの口吟に任せてかくなん仕りぬる」と。て、彼の吹く風の歌を打誦すれば、「實にも秀歌をこそ致しつれ」とて、感歎特に淺からず。花は櫻木、人は武士。斯の人、斯の花を詠じて、花と人と千古に香し。

— 日本史蹟 —

秀歌  
をこ

六 舟 路

島 崎 藤 村

海にして響く櫓の聲、  
水を撃つ音のよきかな。  
大空に雲はたゞよひ、  
潮分けて舟は行くなり、  
静なる空に透かして、  
青波の深きを見れば、  
水底や果も知られず。  
流れ藻の浮きつ沈みつ、  
緑なす草のかげより、

涌出づる泉ならねど、  
 おのづから満來る潮は、  
 海原のうちに溢れぬ。  
 さながらに遠き白帆は、  
 群をなす牧場の羊、  
 吹送る風に飼はれて、  
 わたつみの野邊を行くらん。  
 雲行けば舟も隨ひ、  
 舟行けば雲もまた追ふ。  
 空と水相合ふかまた、  
 諸共にけふの泊へ。

— 藤村詩集 —

七 潮の岬

杉村廣太郎

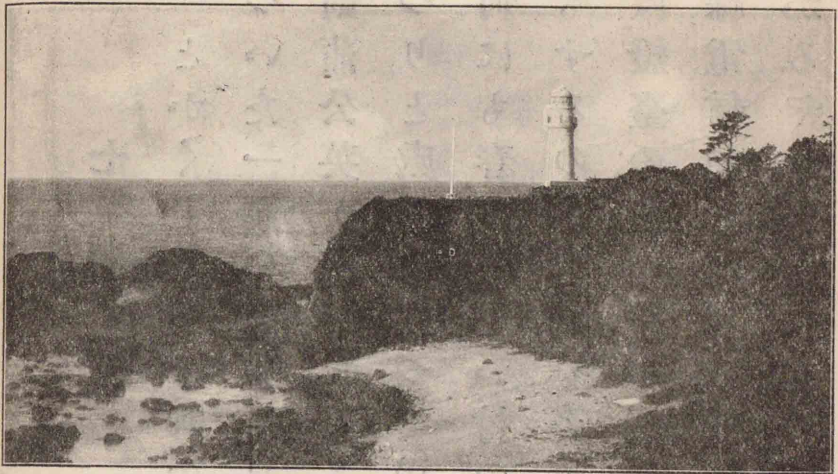
(一)紀伊國最南端  
 の岬。  
 見る目遙に  
 磯馴松

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低の  
 ついた一面の芝生が、見る目遙に打續いて、其の間に  
 薊、蒲公英が咲いてゐる。背の低い磯馴松がぼつりぼ  
 つりと處々に立つて居て、それに繫いだ牛の姿が如  
 何にも春めかしい。村の少女子が此の芝生で鬼事で  
 もするの、か、陽氣な笑聲が遠くから聞える。右の方に  
 は、燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には、無  
 線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちか  
 かるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千

山骨

寄せては返  
し寄せては  
返す

煙波縹渺



潮の岬

年の波に洗はれて、山骨あ  
らにはなつた巖が幾重と  
なく並んで、之に太平洋の  
大波がどろくくと寄せて  
は返し寄せては返してゐ  
る。

僕等は今日日本の本土の  
最南端の一角に立つた。打  
開けた太平洋の海面、煙波  
縹渺として、其の果を何處  
としも覚えぬ。地圖を按ず

①New Guinea.  
又ニギニア  
島。

②California.  
合衆國の一  
州。

③Los Angeles.

るに、此處から正南は恰も蘭領印度のニユーギニア  
を隔て、濠太刺利の大陸に相對し、東は遙に太平洋  
の千波萬波を越えて、北亞米利加はカリフォルニア  
州のローサンジェルスマで、間を遮る物も無い。日本  
の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てら  
れた處の様に聞えるが、其の實此の一角が即ち日本  
と世界との接觸する處である。

まづ此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世  
界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信  
局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。更に海軍の望  
樓に至つては、夜と無く晝と無く、苟くも此の下に船



(一)明治四十二年四月。

(二)Kent: 英國東南端の一州。

の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、偕は其の用向を聞いて傳ふべき處に傳へる。かう世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々とて、其の中から濠洲や、米國に出稼する者の多く出て來たのも無理は無い。荒海を見馴れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れぬ。潮の岬の民は、小さいながらも世界的の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日四月の廿二日。去年は愈、紐育の見物を終つて、明日大西洋に乘出さうとした日。一昨年はずやうど今頃、巴里から倫敦へ向ふ途中、海峡を過ぎてケント州(二)の櫻桃、杏、梨今

を盛りと咲亂れた中を走つてゐた頃である。

折しも望樓で頻りに信號旗が揚る。それと急ぎ見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ばちくくとけた、ましい音を立て、電信をかけてゐる。今迄静まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄に色めき立つて見えた。沖には通報艦の淀が行く。――へちまのかは――

いたたまし

色めく

(一)時あたかも日前。海海戦の

八 無線電信を待ちつゝ 島村 速雄

「世界の無線電信御稿本御送附にあづかり候處、時(一)

節柄にもあり、且は出版御急ぎの事と相察し、ゆるゆる拜讀の餘暇を得ざるは遺憾の至に候へども、其處此處と拾讀致候のみにて、尠からざる興味を覺え申候。

電信の戰爭に至大なる影響を及し候事は、疾く人の知る所に有之、<sup>(一)</sup>今回の戰役に於ても、大山元帥が南滿洲方面に蜘蛛の網の如く張られたる電信電話線を通して、日夕諸方面よりの情報を得られ、數十萬の大軍を指揮して古今未曾有の大勝利を収め居られ候事は、何人も想像し得る事と存候へども、東郷大將が海上に於て目に睹ること能はざる電波を驅つて、

(一)日露戰役。

艦鐘

哨艦

介す

數十隻の艦鐘を手足の如くに指揮し居られ候事は、聊か世人の想像の及びかね候事かと存候。昨年數箇月の間旅順口封鎖の節などは、大將は大抵常に同地より數十里の海面に居られたる事に候が、旅順港外に配置せられたる我が哨艦より、無線電信により日夕敵の情報を受けられ候へば、端艇の港口出入に至るまで、殆ど手に取る如くに承知せられ候のみならず、攻圍軍日々の通報の如きも、大連灣碇泊の中繼船を経て、やはり電波の力により絶えず承知せられ、大將も之に應じ、また電波を介して、それ〴〵我が艦隊を指揮せられたりと申す次第に有之候。且此の無線

倦怠

趣味津々

電信は陸上電信線による通信の如くに獨り發信者と受信者との間にのみ通じ候にては無之、電信機械を備へ居候各艦へ同時に知れ渡り候事なれば、各艦とも新聞號外の類を待たず、時々刻々新しく且活きたる情報を即座に承知し得る次第に候。長日月の間困難なる封鎖勤務に於て、全軍に些少の倦怠をも生ぜずして相濟みしは、主として無線電信の賜と相感じ申候。他日若し當時各軍より發せる無線電信の一日分のみにても一讀致候はゞ、趣味津々たるを覺え申すべくと存候。而して我が海軍の無線電信をして右の如くに有効ならしめたることは、貴下多年御盡

巧緻  
今はの際

力の功多きに居候事と、ひたすら敬服致居候。惟ふに本邦に於ても、無線電信の事を研究せる人士尠からざるべく存候へども、時局の必要に迫られ、専心一意、學理と實驗とを併せて、貴下程十分に此の事を研究せる人は、恐らくは又他にこれあるまじく、今其の人に、よりて其の學の好著述世に出で候事は、誠に科學界の幸福にして、定めて非常の歡迎を受けられ候はんと、今より期待致居候。

殊に貴下が序文中に於て、此の最も新しき科學の發明に係る巧緻なる機械を、最も古くより傳來せる大和魂を以て、今はの際まで泰然として使用せし軍

(一)明治三十七年五月十五日の夜、無線電信の室に當り、直せし三等兵曹竹村倉之進、一補助を爲し、小山音市、水兵小澤、吉野に關する事蹟。

會心  
(二)吉野艦長佐伯

艦吉野無線電信係下士卒の忠烈なる事蹟を紹介せられたる事は、最も會心の點にこれあり、獨り小生が當時の事を回想して感動致候のみならず、亡友佐伯大佐も定めて地下に満足致候はんと察し候。此の事蹟たるや、教育上の注意によりては、科學の進歩が決して我が大和魂に何等の障礙をも與ふるものにあらざること、を證明致候ものにて、識者の擧つて感謝すべき事と存候。

抑、小生共は日夜無線電信の恩澤に浴し居りながら、其の原理の如きは今に了解に苦しみ、却つて他の感想に馳せ候事も之あり候。即ち開戦以來、我が四千

至誠天に通す

感應す

従容

餘萬の同胞が、各其の分に應じて義勇公に奉じつゝ、ある至誠天に通じ、一種靈妙にして物質界の電波に對比すべき正氣の活動を起し、出征軍隊と後援國民との間に互に感應して、かく都合よく戦局を進めつつあるにあらざや、而して其の氣の凝るや、恰も電氣の結んで雷電となれるが如く、或は奮激死に赴く決死隊となり、或は従容死に就く吉野無線電信係の如きものとなり、壯烈鬼神を泣かしむる幾多忠勇の士を現じつゝ、あるにあらざや、などの感想を起し候事に有之候。

餘事はさておき、貴著述に對し、序文御求にあづか

がらに無き

り候處、これはとても小生のがらに無き大役に御座候間、平に御斷り申上候。尤も此の拙文中に記載致候事柄にして、何等かの御役に相立ち候ものこれあり候はゞ、御隨意に御使用下さるべく候。まづは他に先だち貴著拜讀の光榮を得候ことの御禮、且は昨年来度々の御懇書、殊に珍しき外國新聞紙の御惠贈に對し、何等の御挨拶をも申上げざりし缺禮の御詫を兼ね、右申述候。時下不順の候、益、御自愛、斯學の御研究を重ねられ、遠からず貴著標題に二字を加へ、「世界無比の無線電信」を我が海軍に貢獻せられんこと切望の至に御座候。敬具。

貢獻

明治三十八年五月二十五日夜、時々刻々、波爾的艦隊見ゆとの無線電信を待ちつゝ。

軍艦盤手電燈の下に於て

島村速雄

木村駿吉殿

—世界の無線電信—

九 トラファアルガルの海戦 其の一

小笠原長生

ナポレオン一世身を陸軍の一將校より起して、忽ち佛國の帝位を踐み、四方を制壓して天下を睥睨す

(Napoleon Bonaparte. 西曆一七六九—一八二一)  
天下を睥睨す

震懾屏息

[Boulogne] 佛蘭西の北部英吉利海峡に臨める海港。

虚に乗ず

粉碎

[Horatio Nelson] 西暦一七五

八—一八〇五)

猖獗

るや、列國の群雄皆震懾屏息して、其の部下に屬せしが、ひとり英國のみは孤立を守りて敢へて屈せず、其の島國たるを利用して、優勢なる海軍を備へ、海上の權力を握りて、しばし佛軍を悩ましたり。こゝに於て、ナポレオンは畢生の力を盡し、雄兵十五萬をブローニウに集め、船舶二千五百餘隻を海岸に浮べ、先づ艦隊を四方に分ち、以て英國艦隊を他に導き、其の虚に乗じて陸兵の大輸送を行ひ、二十餘海里の海峡を一躍して英國を粉碎せんとせり。  
英國の海軍提督ネルソンは、豫てよりナポレオンの猖獗を制し、歐洲人民に自由を與ふるを以て、己の

天職

[Cadix] 西班牙南部の海港。トラファルガル岬は其の南方に在り。  
[Villeneuve]

[Trafalgar]

(四)光格天皇の文  
化二年。

天職なりと確信し居たりしが、今ナポレオン大舉して英國を侵略せんとすと聞き、佛帝たとひ鬼神の術ありとも、其の海岸を距る一海里の外に出でしめじ。といひて、直ちに敵の艦隊を追尾して、カヂズ港の附近に到りぬ。時に佛國の提督ヴァイルヌーブ<sup>(一)</sup>西班牙艦隊と相合し、四十餘隻の軍艦を督し、死を決して英國艦隊と戦ふ用意をなせり。ネルソン之を覺り、三十餘隻の軍艦を率ゐ、進みて<sup>(二)</sup>トラファルガル岬の邊に達し、遂に敵の隊と相會す。時に西暦<sup>(四)</sup>一千八百五十年十月二十一日なり。  
ネルソン敵の横陣を布くを見て、喜色面に溢れ、總

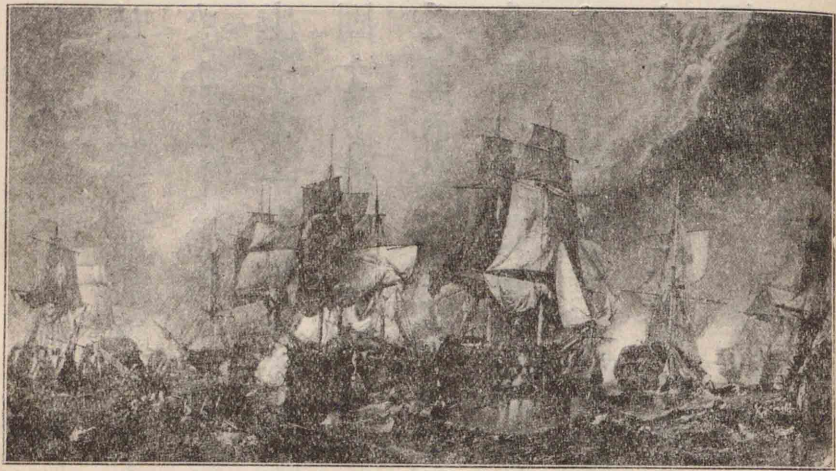
Collingwood.

艦隊を分ちて二隊の縦陣とし、副提督コリンダウ  
ドをして其の一隊を指揮せしめ、風下に方れる敵の  
後殿艦より第十二位に列せる艦の間に進入すべき  
を命じ、みづからは他の艦隊を率ゐ、敵陣の中央を突  
貫して先づ其の一部を撃破せんとせしが、佛將ヴィ  
ールヌーブ之を察し、其の艦隊を二列に排布し、前隊  
各艦の間にあたる點に後隊の各艦を列せしめ、相依  
りて空隙をからしめぬ。

Victory.

Blackwood.

時に英國艦隊の旗艦<sup>(二)</sup>ヴィクトリー號の上甲板に  
佇立せるネルソン、側なるブラックウッド<sup>(三)</sup>を顧て、「君  
は幾何の敵艦を捕獲せば、我が勝戦なることを是認



(筆ドロー・ファンタズ)戦海のルガルッフラト

すべきか」と問ふ。ブラックウ  
ード「十五隻を捕獲せば以て  
偉功となすに足らん」と答ふ。  
ネルソン頭を振り、「否、われは  
二十隻を捕獲するにあらず  
ば、満足すること能はざるべ  
し」といふ。やがて其の室に赴  
き、正装して燦爛たる數箇の  
勳章を胸間に懸け、肅然とし  
て天に向ひ、「神よ、願はくは我  
が英國に赫々たる大勝を授

塗炭の苦み

け、全歐洲の人民を其の塗炭の苦みより救ひ給へ。願はくは我が將卒をして一人も卑怯の舉動をなす者なからしめ給へ。併せ願はくは戰勝後我が軍の事を處する、一に仁慈を以てせしめよ。ネルソンの一身は固より惜しむに足らず。たゞ我が忠誠を憐みて擁護を垂れ給へ。」と禱りて、やがて甲板に出でたるに、敵艦愈、近づく。英軍の意氣益、壯なり。ネルソン復ブラックウードを顧て、「なほ一信號旗の掲げざる可からざるものあり。」とて、直ちに信號兵に令し、信號旗を檣頭に掲げしむ。

擁護を垂る

其の信號は、英國は各自が其の本分を盡さんこと

狂喜措く能はず

を期待す。」といふことなり。英國總艦隊之を望みて、狂喜措くこと能はず、拍手喝采の聲、海波も爲に震はんとす。ネルソン莞爾として、今ははや準備に於て遺憾なし。餘はたゞ神と我が正義とを頼まんのみ。」といひしが、やがて、「接戦せよ。」との信號旗は、檣頭高く掲げられたり。

旗艦ヴァクトリー號前驅率先して進みしが、着彈距離に達するや、數隻の敵艦これに向ひて砲撃を始め、飛彈交、ネルソンの頭上に轟く。ブラックウード其の本艦に還らんとして、ネルソンと握手しつゝ、「余はまた速に本艦に來りて、敵艦二十隻を捕獲せる閣下



意氣軒昂  
眉宇の間

の壯貌を拜すべし」といへば、ネルソン「われは既に國家の爲に一身を犠牲にせんとせり。再び相語ることを期せず」といふ。意氣軒昂、爽快の色、其の眉宇の間に溢れたり。

一〇 トラファルガルの海戦 其の二

時に副提督コリングウッドの旗艦ロイヤル・ソブリン號は、其の艦隊の先登に立ちて、健帆風を孕みて、西班牙の戦艦サンタ・アナ號に向ひて進みしが、其の艦尾に達するや、二弾を重填せる左舷の大砲を一齊に發射し、忽ち之を撃破せり。ネルソン遙にこれを

Royal  
Sovereign.

Santa Anna.

好丈夫

索具

望み、欣然として左右を顧つゝ、好丈夫の意氣を見よ。壯烈鬼神の如し」といふ。既にして佛の諸艦、皆ヴィクトリー號を目蒐けて進み來りしかば、飛彈實に急雨の如く、艦體破壊し、索具斷絶し、兵士の戦死するもの頗る多し。然れども尙堅く忍びて一發も應砲せず、益進みて佛の提督ヴィールヌーブの旗艦を索む。ヴィールヌーブ之を避けんがため、殊更に將旗を掲げざりしかど、ネルソン其の陣形によりて、旗艦の第二位にあることを看破し、猛然之に薄り、先づ艦窓に向ひて小銃五百の一齊射撃を行ひ、續いて三弾を重填せる左舷の大砲を一時に發射せり。波濤驚き、雲霧裂け、

看破す

其の音百雷の一時に落つるが如く、敵兵四百算を亂して殪れ、二十門の巨礮毀損し、艦體大破して、また用ふるに能はざるに至れり。

こゝにネルソンいよく奮戦して進み、右舷の諸砲を以て別に敵艦レゾータブル號を砲撃しつゝ、遂にこれに衝突せり。此の時に當り、英の諸艦長各猛進して佛艦と接戦し、兩軍の戦正に酣にして、奮闘殆ど一時間ならんとする折しも、レゾータブル號の檣樓より一發の銃丸飛來りしが、甲板上を急走せるネルソンの肩に中りて之を倒したり。衆駭きて相集り、直ちにネルソンを扶け起しぬ。ネルソン、艦長ハーディー

Redoubtable.

Hardy.

沮喪

を見て、佛奴われを狙撃し、彈丸我が脊髓を貫けり。恐らくは復起つ能はざるべし。といふ。かくてネルソンは、我が負傷の一事、いたづらに兵氣を沮喪せしむることあらんとて、徐に手巾を出し、我が面部と勳章とを蔽ひ、擔はれて治療室に入りぬ。時にレゾータブル號の兵士、艦上に襲撃隊を組み、將に突入し來らんとす。英兵急に小銃を亂射してこれを却け、なほ大小砲を連發して其の過半を殪し、かば、彼等は力竭きて遂に降伏せしが、續いて敵艦の其の旗章を下して降を乞ふもの引きも切らず。ヴィクトリー號の兵士、拍手歡呼して聲雷の如し。ネルソン治療室にありて

之を聞き、思はず微笑せり。  
 ハーデーたま／＼、ネルソンの側に來り、捕獲の敵艦十二隻に下らず」といへるに、ネルソン「我が艦の敵に降れるもの無きか」と問ふ。ハーデー聲に應じて、「一隻も無し」と答ふ。ハーデーやがて甲板に上り、一時間を経ずして再び訪來れるに、ネルソン其の艦隊をして投錨せしめんと、の念切なりしかば、之をハーデーに命ず。ハーデー「艦隊の運命は副提督コリングウー下の指導に任せ給へ」といひしに、ネルソン頭を振り、「苟くも我が殘喘なほ存する間は、何ぞ指導の權を他人に委せん」といふ。

殘喘なほ存す

氣息奄々

耳朵

既にして薄暮に至り、佛西兩國の聯合艦隊大敗して、砲聲全く収り、ネルソンの氣息も亦奄々たり。左右口を其の耳朵にあて、全勝我が軍に歸し、敵艦二十隻を捕獲せり」と報ぜしに、ネルソン莞爾として、遂に瞑せり。

—帝國海軍史論—

一一 少ピット

雙肩に擔つて起つ  
 國歩艱難  
 不世出の英才  
 William Pitt

西曆一千七百五十九年五月、天は英國の爲に、將來其の國を雙肩に擔つて起ち、國歩の艱難を救ふべき不世出の英才を下した。ウイリヤム・ピットは即ち其の人である。彼は當時の長老政治家として畏敬せら

〔通稱チャタム伯〕 Earl of Chatham, (西曆一七〇八—一七七〇)

神童

れた老ピット(一)の第二子で、父に對して、少ピットと呼ばれてゐる。



少ピット

少ピットは幼時から身體が弱かつたが、其の才智は非常に發達して、夙に神童を以て許されてゐた。尋常の小兒の様に、戶外で遊戯するのを好まないで、常に讀書に親しみ、之を何よりの快樂とし、「熱心なウイリヤム」又は「少年哲學者」の綽名を得た。單に記憶力の優秀であつたのみで無く、其の思慮、判斷も、少年時代から老熟してゐた。老ピッ

トが功勞に依つて伯爵を授けられた時、僅かに七歳の少ピットは母に向つて、「私は次男に生れたのが喜ばしい。父上のなさつた様に、花々しく下院で働くことが出来るから」といつたといふ。貴族の長男は其の家を繼ぐので、下院の議員たる資格を得られないからである。

ピットは十五歳でケンブリッヂ大學に入學したが、其の學才は忽ちにして同輩を凌ぎ、學長をして舌を捲かしめた。加之其の起居の端嚴なことは、他の學生の模範であつた。

老ピットの永眠は少ピットが十九歳の時であつ

〔Cambridge, 英國の有名な大學。英京倫敦市の東北四十八哩にあ

る〕  
舌を捲かしむ

永眠

時局

いち早く

た。父が時局の困難な問題の爲に、重い病の床から出て、議場の演壇に立ち、最後の大演説を試みた時、少ピットの若い眸は、熱心と敬愛とに輝いた。演じ終つて父が卒倒した時、いち早く駆け付けて介抱したのは少ピットであつた。父は再び起たなかつたが、其の精神は其の子に傳はつて、更に偉大な力を發揮した。子は父の偉業を繼ぐことを生涯の目的とし、父は我が子の自分よりも有爲なるべきを知つた。

父の歿後、ピットは益々精勵して、學才を磨き、辯舌を練り、早くも二十一歳の時、議員の總選舉に選ばれて下院の一議席を占めた。かくて始めて壇上に立つて

處女演説  
好奇の視線  
を注ぐ

處女演説を試みた時、滿場の人は此の少壯議員に好奇の視線を注いだ。其のあざやかな論旨、きつぱりとした態度、銀鈴を振る様な美聲に、一同酔へるが如く、感歎の聲は堂を搖がすばかりであつた。

聲望

ピットの聲望は日を経るに随つて高まり、一千七百八十二年には推されて内閣の一員に列し、越えて八十三年十一月には遂に内閣總理大臣となつた。時に年二十四歳。餘りの若年であるから、國民中には輕侮と危惧との念を以て此の内閣を迎へたものもあつたが、己を信ずることの飽まで篤いピットの才力と愛國心とは、快刀亂麻を斷つ勢を以て、當時の紛亂

快刀亂麻を  
斷つ

信望

を解決し、漸く國民の信望を得、十七年の久しき其の内閣を持続した。二十四歳の壯齡で首相となり、よく國家の危殆を救つた此の人に比肩し得べきもの、古來各國の政治家中、果して幾人あるであらうか。

折衝

ピットは一方には内政に意を用ひ、實業を振興し、財政を整理し、交通を改修して、國利民福を進めると共に、他方には外國との巧妙な折衝によつて、大英國の地歩をして確實鞏固ならしめることが出來た。殊に晩年に於て苦慮したのは、佛帝ナポレオン一世との對抗であつた。當時ナポレオンは殆ど全歐洲を席卷した勢を以て、英國をうかゞつたがナポレオンの

全歐洲を席卷す

一指を染む

雄圖を以てして、尙英國の本土に一指を染め得ず、遂に怨を呑んで没落の悲運に陥つたのは、ピットが病弱の一身を以て國難に當り、内に國民の愛國心を鼓舞し、外に名將勇卒を送り、畫策大いに努めた偉功に歸せねばならぬ。トラファルガルの海戰に佛國の大艦隊を全滅させたネルソン提督も、<sup>(一)</sup>ウオーターローの陸戰にナポレオンの死命を制したウェリントン將軍も、其の初は實にピットの人を見る明識によつて推舉せられた人々であつた。

畫策

(Waterloo) 今の白耳義の村。西曆一八一五年。死命を制す。Wellington. 英國の將軍。

勇猛心

生來虛弱なピットは不斷の勇猛心を以て、多年國事に奮闘したが、一千八百六年、四十六歳を以て其の

今はの時

光榮ある一生を終つた。當時ナポレオンの勢力は尙盛であつて、聯合軍の敗報は頻々として來た。ピットは重病の床上、其の報知を得る毎に、深く國家の前途を憂へて、心を傷ましめた。今はの時にも、「おゝ我が國家よ」と一言の叫を漏したといふ。ピットは實に短命であつた。けれども其の愛國の至誠に燃立つた精神は、永く大英國の國民の心に生きてゐるのである。

一二 初夏の感

大町 桂月

春盡きて夏來る。之を人生に譬ふれば、少年期を過ぎて青年期に入りたるなり。古來五月五日を男子の

生々潑刺の氣

素因

感受性

祝日とす。新緑地に満ち、鯉幟勇ましく、天空に舞ふ。吹く風も暑からず、寒からず。筍此の際地を劈いて出づ。蕨も出づ。燕は舊巢に來り、雲雀は啼いて天に昇る。あらゆるものみな蘇生して、生々潑刺の氣、天地に満つ。これ初夏の特徴なり。青年期の特徴も亦之に類す。身體も忽ち見違ふばかりに發達し、精神も亦非常の速度を以て發達す。請ふ、其の感受性を正しく向上せしめよ。其の生々の氣力を善用せよ。率直にして曲らざれ。無邪氣にして僻まざれ。餘りに早く老成的にかたまらざれ。横に張るよりは上に伸びよ。大いに發達するの素因自ら其の中にあるべし。

——すゝりの水——

一三 平和の家

徳富蘆花

端午

雪が消える。やがて青葉が茅屋の四面をつむ。後の山に子規が鳴く。軒端に菖蒲を茸く。今日は舊暦端午の節供、一家團欒して「耳くじり」の式を終へた。此は長芋の小さなので耳に栓をさし、本年中吉事を聞く様に、凶事を聞かぬ様にと祝ふのだ。

五月の節供も過ぎて、向山に「ぼっぼく」と小鳥が鳴いて、初夏の日はうらくと晴渡る。良平の母は勇み立つて、

「お、ぼっぼがもう鳴いてゐる。昔から言つてゐる。

ぼっぼ鳥が來れば、粟播の節だと。さあ、皆の衆と鍬を擔つて、山畑に登る。

「良平さん、今日は學校は休かよ。」

「あ、休です。」

「そんなら山へ行かうよ。山吹も咲いてゐる、躑躅も咲いてゐる、鶯も啼いてゐる。家の中にくすぼつて一日居るより身體には藥だよ。」

「あ、僕も行かう。」

母について山畑に行く。松の樹に登つたり、竹を切つたり、花を折つたりして遊んでゐる。やがて晝食時になれば、皆鍬をとる手を休めて、松の下に蓆を敷いて、

家の中にくすぼつて居る



明星の光

谷川の流を汲んで、稗飯を囓む。  
初夏の日は西に入る。一家明星の光を踏んで歸る。  
飼犬の「やま」が、尾を振つて土橋の邊に出迎へる。鹿毛の馬は、厩の中から皆の負つて來る春草の香ばしい匂を嗅ぎつけて、「ぶふッ、ぶふッ」と鼻を鳴して居る。

松の根を金皿かまざらに燃した燈火は、明るく藪の御殿、藁の間の臺所を照して、大きな鍋には一尾の鱒が煮られ、大祖母、祖母、父母、兄姉、良平、妹、僕婢等一同が集つた前に木椀に盛つて並べられる。良平の椀には山の様に盛つてある。祖母が自分の椀の中から肴の片を挟みあげて、良平の椀に入れ、良平の頭を軽くたゞいて

夜の幕

去る。皆がドッと笑ふ。あとは靜に夜の幕が落ちて、圓かな夢に入る。  
——寄生木——

詩趣

(一)北海道帝國大學農科大學。

一四 詩的農園

菊池 幽芳

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は農科大學(一)に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備、完全なるに近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地にて求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して少しの遺憾を感ずる無く、經營の手腕は縱横に發揮せられて餘蘊

凡百  
餘蘊

風致

障屏  
紫翠

相凌ぎ相排  
す

星の雫

無きに近し。然れども余はこゝに農園の設備を説かんとするものにあらず。余の記さんとする所は、唯其の風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。西北の二面全く開け、平野遠く連りて、西は遙に札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指して、其の際涯を知らず。萋々たる牧草氈の如き處、こゝにはかの林中の雜樹の互に相凌ぎ相排するが如きこと無く、廣き空間を占めて處まばらに立てる榆ありて、晝は残る隈無く日の光を浴び、夜は思ふが儘に星の雫を受く。何に遮らるゝものも無き其の根は、太古の儘なる土壤より潤澤なる養分を吸取り

て、鬱蒼たる其の枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、亭々たる其の幹は以て百尺の空を摩す。一たび足を此の農園の牧場に入るゝもの、誰か遺憾無く發揮せられたる此の榆の美に驚歎せざらん。

それ廣漠たる平野の緑は、既に人の心を快潤ならしむ。これに喬木の亭々たるを配する時、誰か一段の風致の添來るを覚えざらん。唯其の喬木の種類によつては、また其の風致に多少の増減無き能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は、松にあらず、杉にあらず、實に其の高さと共に深さを有し、深さと共にまた其の幅を有するもの、分明に言へば、其の枝葉

ば分明に言へ

書の如く詩の如し

脳裡に描く

風趣

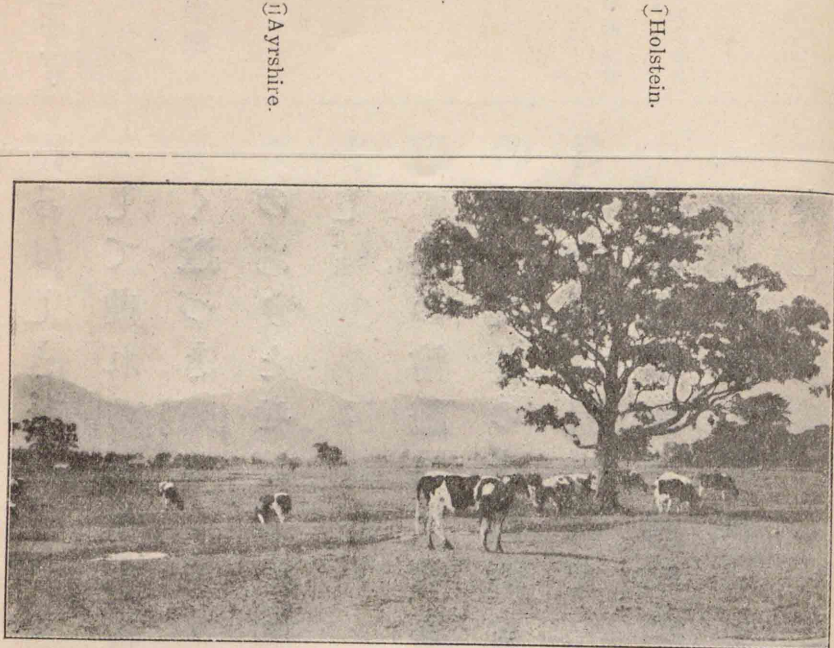
静態

點す

動態活躍

十重、二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き樹蔭を作る喬木たらざるべからず。請ふ、かくの如き喬木の、森として青緑の平野に立てる様を想像せよ。何ぞ其の畫の如くにして、又詩の如くなるや。人若し十分にかゝる想像を回らすことを得たりとせば、其の人は即ち遺憾無く札幌農園を其の脳裡に描き得たるなり。

農園が楡によつて其の風趣を加ふることかくの如し。然れども、これをほ静態に於ける風趣のみ。更に此の間に牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つて、農園の眞風趣は始めて動態となりて活躍す。



(Ayrshire)

(Holstein)

札幌農園

丈高く、四肢長く、體軀驚くべき程巨大にして、黑白の斑を有せるホルスタイン種の牛が、其の大樹の下に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼やさしく四肢短きエイアシャ一種の牛が、此處に彼處に草を食へる、或はさまよへる、或は尾をふれる、更にう

Merino.

樂園

るはしき毛を被れるメリノ種の羊が、其の角の大にして曲れるには似ず、いとやさしき眼光もて、馴々しく近づき來るを見ずや。若し此の世に樂園といふものありとせば、其の關門は實にかくの如き處なるべし。

其の繪畫的なる、其の詩的なる、又附近の建物と相待つて其の米國的なる、少くともこゝに來るものは、内地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。余は札幌農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、又此の學校より、往々文章の士を出せることの、決して偶然にあらざるを知れり。——日本海周遊記——

一五 桶狹間の戰 其の一 遠山信春

(一)尾張國西春日井郡。  
(二)尾張國愛知郡。  
(三)水祿三年。  
(四)尾張國知多郡。桶狹間の西北一里半。  
(五)尾張國知多郡。

對揚  
切所

承引

織田上總介信長公、清洲の城に御座ありけるが、近日鳴海に出向ひて無二に今川と一戰を遂ぐべし。と仰せらる。林佐渡守等、敵は四萬に及ぶ大軍なり。味方三千の御人數にて、平場の御合戰、對揚すべき事にあらず。只此の城に楯籠らせ給ひて、敵を切所に引請けて戰はせられよ。と諫め申し上げけれども、此の儀少しも御承引なし。  
さる程に五月十八日の夜に入りて、敵は大高に參着の由丸根の城佐久間方より脚力を馳せて申し上

猿樂

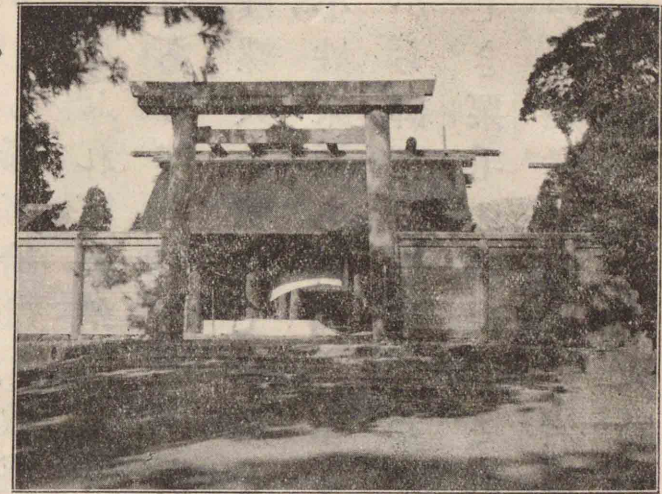
智慧の鏡も曇る  
笑止  
注進(一)尾張國知多郡。

げけり。信長公御家老を集められしに、軍の評定はこれ無くして、唯世上の御雜談にて御酒宴に及ぶ。宮福大夫といふ猿樂、羅生門の曲舞をなし、兵の交頼ある中の酒宴かな。と謠ひければ、殊の外御感有りて、黄金を下され、既に夜も深更に及べり、各宿所に歸りて支度あるべし。とて出されけり。家老の面々互に顔を見合せつゝ、口々に、日比は良き大將なれども、御運の末と相見え、智慧の鏡も曇るやらん、さしたる軍の御工夫も出でぬと見えて笑止なり。と言合ひて歸りけり。かくて其の夜の明くるを待たせ給ひけるが、夜既に明方の事なるに、鷺津(一)の城より注進あり、敵只今鷺

物具

津、丸根兩城へ人數を取掛け候。と追々申し來る。信長少しも騒ぎ給はず、敦盛の舞の、人間五十年、下天の内を比ぶれば、夢幻の如くなり。一度生を受け、滅せぬ者のあるべきか。といふ所を繰返し舞はせ給ひて、さらば螺貝を吹立て、具足をおこせよ。と仰せられければ、小姓衆乃ち御鎧を奉る。靜に御物具を召固め、立ちながら御食を三杯まゐり、御冑の緒をしめられ、太く逞しき栗毛の駒に召されつゝ、閑々と御出馬なり。御供の小姓衆御寵愛の岩室長門守を始め、長谷川橋介、山口飛驒守等主従六騎、其の外雜兵二百餘人、熱田まで三里の間を一時に驅附けられ、熱田大明神の旗屋口

に着かせ給へば、諸勢方々より馳参してはや千騎に



熱田神社宮

なりぬ。當社大明神へ御参詣ありて、合戦の勝利の御祈願を掛けられ、一通の願書を籠めさせ、やがて社頭より御旗を進め給へば、白鷺二つ御旗の先に飛行くを、あれこそ當社大明神の擁護し給ふ驗よ。とて、諸勢を勵まし進まれけり。

源大夫の宮の前より東を御覽ずるに、丸根山、鷺津

擁護

(一)熱田神宮の門前約半町。俗に智慧の文殊といふ。

(一)愛知郡呼禮の南。

山両城ともに落城と見え、黒烟雲に連りて夥しければ、少しも早く馳附けたく思し召す。濱手よりは近道なるに、それさへ今朝は満潮さし入りて、馬の通ひも叶ひ難し。其の日の辰の刻に、漸々熱田より笠寺の東上道の細繩手を、揉みに揉みて驅けさせられ、道々の

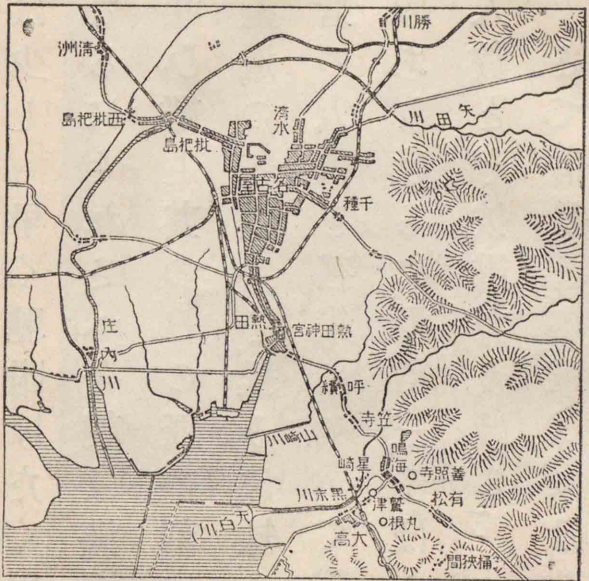
勢揃

披露

岩の人数を召集め、やがて善照寺の東の狭間にて勢揃ありけるに、漸く三千ばかりなりけれども、五千の人数とぞ披露有りける。

さて信長公御軍謀には、敵の先手の大軍を皆本道に遣過して、當方の人数はひそかに山の陰に廻り行きて、義元の本陣へ一度にどつと突掛り、切崩さんと

の結構なり。義元之をば知らず、桶狭間の山下の芝原に敷皮しかせ、先手の者共が鷺津、丸根の両城を攻落



興に入る

ばかりにて、信長公の御旗を待受け、山際に控へ居た

る駿河勢へ打つて掛る。佐々、千秋小勢なれば取圍ま  
れて、五十餘人討取られ、駿河勢勝誇りて、隼人、四郎両  
將の首を取りて槍の先に差上げて、一度にどつと鬨  
を作る。しかのみならず、信長公の寵臣岩室長門守も、  
拔駈して討取られぬ。佐々、千秋、岩室三人の首を本陣  
に遣はし、義元に見せ奉れば、義元愈、勇み誇りて、「某が  
鋒先には、いかなる天魔波旬なりとも堪るまじ」と宣  
ひて、なほ勝軍に驕を極め、酒宴に耽りて居給ひけり。

天魔波旬

一六 桶狭間の戦 其の二

さても信長公は、これより中島へ移りて合戦を始

一騎打

あせる

勿體なし

無理無體

めん」と宣ひければ、人々大將の謀を知らず、池田勝三郎、毛利新助、林佐渡守、柴田權六等御轡に取附きて、「こゝは両方深田の中、一騎打の細道なり。之を通り過ぎ給はば無勢の様體、敵方よりさだかに見透かし侍るべし。其の上勝をあせりて、威勢強き敵の中へ此の小勢にて向はれん事、勿體なき次第なり。たゞ切所に待受けて御合戦候べし」と各諫言申しけれども、無理無體に振切つて、中島へ移らせ給ひ、中島よりまた討出でんとしたまふを、なほも彼の面々聲々に止め申しけり。

其の時信長公人々を顧て、「凡そ合戦の習は、勢の多

新手  
思ひ切る

安堵

少によるべからず。殊更此の敵は昨日は大高城へ兵糧を入れ、また今朝は鷺津、丸根両城の合戦に精を盡し、辛苦艱難して、疲れ果てたる人數なれば、大勢といふとも猛からず。此方は新手にて思ひ切りたる軍兵なり。敵の思ひもよらぬ所へ、無二に掛つて突崩さば、なにか勝利を得ざるべき」と大音聲に下知し給へば、一同げにもと安堵しけり。

さて「今日の合戦は、首取るべからず、打捨なるべし。此の軍場へ出づる者は、家の面目、末代の高名たるべし」とて、諸勢をいさめて掛り給ふに、先驅の前田犬千代、生年十八歳、毛利河内、森十助、木下雅樂助、中河金右



衛門、佐久間彌太郎、森小助、安倉彌太郎、魚住隼人等高名して、手に手に首を持來る。信長公御感有りて、皆々旗を巻き、忍びやかに山際まで押附け、敵勢の後の山を押廻つて、義元が本陣に討つて掛れ」と下知し給ふ。築田出羽守申し上ぐるは、「敵の後陣は先陣たるべし。只今此の口より突掛り差向はせ給ふならば、必ず大將義元を討取るべし」と申しければ、さらばと、忍びて山際を廻らせ給ふ。

俄に大雨降來りて、石などを投ぐる如く敵の顔へ風吹きかく。敵の爲には向風、味方は後より吹く風なり。餘りに強き風雨にて、沓掛(一)の上の山に生ひたる

(一)愛知郡。

二かい三がいの松の木、楠の木なども吹倒すばかりなり。これ只事にあらず。熱田大明神の神軍か、神風かなんどといふ程なれば、味方の大勢廻り來る物音少しも敵に聞えず。やがて雨の晴間を御覽じ、晴天になるとひとしく、信長公槍追取つて眞先に進ませ給ひ、「掛れ」と大音あげて下知し給ふを、森三左衛門申しけるは、「味方おり立ちて掛るならば、敵きつと備ふべし。唯此のまゝ馬を入れて、乗崩し給へ」といふを、尤もなり」とて、毛利新助、織田造酒丞、築田出羽守、中條小市郎、遠山甚太郎、同河内守等、大將に打續いて一度に馬をどつと入れ、其の勢勇みに勇んで、黒煙を立て、

裏切  
算を亂す

馳破れば、敵陣思ひも寄らぬ所へ俄にかゝられ、心ならず、後へさつと崩れたり。敵ども餘りにあわて騒いで、「喧嘩か。」と言ふ者もあり、「謀叛か、裏切か。」と思ふもあり。取捨てたる弓、鐵砲、旗指物は算を亂すに異ならず。中にも義元の乗給ひし塗輿を捨置きたり。信長公是を御覽じ、敵の旗本疑なし。愈、追詰めよ。とて、同未の刻東へ向いて追掛け給ふ。

初は敵三百ばかり義元を圍んで退きけるを、手しげく追附けらるゝにより、二三度四五度取つて返し討死して、次第々々にまばらになり、後には漸々五十騎ばかり取つて返して戦ふ處を、信長を初として、皆

しのぎを削  
り鑿を破る

したゝかな  
る者

皆馬より下立ちて、荒武者互に先を争ひ、しのぎを削り、鑿を破りて、切先より火焰を出し、散々に戦ひける程に、手負死人は數を知らず。今川義元は無双の勇者にて、なほこれまでも騒がず、諸勢を下知し居給ふ所を、織田方の服部小平太、槍を以て突通したり。義元太刀を抜いて、小平太が膝の口を一刀切割き給ふ。小平太尻居に切附けられて、起上ること叶ひ難し。毛利新助來りて、透間無く切つて掛り、義元の首を取らんとす。義元組伏せられて、はや刀にて切ることとも叶ひ給はず。新助が人差指にかつばと嚼付き、終に其の指を食切り給ふ。新助元よりしたゝかなる者なりければ、

なじかはた  
まるべき

指を食切られながら、押附けく、義元の首を取る。義元今年四十二歳なり。

残る敵どもなじかは少しもたまるべき、總軍一度に敗北して、四方八方へ崩れ立ち、後より逃ぐる味方を、敵の追ふよと見損じて逃散る所を、此處に押詰め、彼處に追詰め、思ふ儘に攻附けけり。抑、此の桶狭間といふ所は、山のはざま深田の邊にて、高み卑み打茂り、足場何れも切所なれば、逃行く者ども一入に途方を失ひ、悉く討取られぬ。味方の若者ども追附きく、首二つ三つ宛討取り、御前へ参りけるを、餘の首は清洲にて御實驗あるべしとて、義元の首ばかりを御一

覽成され、御馬の先に其の首をもたせ、勝鬨を作つて、其の日の申の刻に、清洲を指して御凱陣あり。首帳を記されけるに、二千五百とぞ聞えける。之よりしてこそ、信長公の名譽は天下に轟きけれ。 — 總見記 —

一七 豊太閤

山路 愛山

世に、大きな人物、小さな人物といふことあり。如何なるものが大きくして、如何なるものが小さきかと、科學的に説明するは難儀なれども、とにかく大きなもの、と小さなものとのある事は勿論なり。豊太閤は其の中にて殊に大きな人物と見えたり。

科學的

(一)名は了伯。兵法に通じ又槍をよくす。慶長六年(一六二二)歿。年四十四。

小刀利

太閤小田原征伐の後、奥州に下向せんとて、途中、佐野天徳寺を招き、信玄、謙信の様子を聞き、さ様に、ほかの行かぬ小刀利の武道にては、天下に思ひ掛くる事は、なかく、思ひ寄らざる事たるべきなり。此の者など早く相果て、外聞をば失ひ申さず候。其の故は、只今迄これあるに於ては、秀吉が草履取に使ふべき者なり。といひたりといふ。小刀利の一句、信玄、謙信の事業を評し得て、骨髓に達したりといふべし。二家共に、兵法に掛けては比類無き英雄ながら、力の入所が小さき所に局したる故に小刀利なり。太閤はさやうに小さき所に力瘤を入れず、恰も大風の吹くやうに、ばつ

骨髓に達す

局す

力瘤を入る

としたる行き方なり。

(一)豊臣秀次に仕へし小瀬甫庵の作。

沈思  
毫髪も残さず

仁俠

寛宥

甫庵(一)太閤記に、天正十五年島津征伐の時、太閤既に肥後國八代まで進みたることを記し、さて八代にて太閤一夜沈思しけるは、遠國の果々までも、毫髪も残さず退治せんと思ふは小志なり。残る城々をば免しおき、急ぎ歸陣し、四方泰平の謀計に及ぶべし。とて、或は一揆、或は仁俠せし僧坊、残らず御免なさる、條、罷り出で安堵の御禮申候へと高札を立てしかば、此は寛宥なる御下知かなと悦びあひつゝ、方々より集り來り、御禮申し上げんとて、門前市をなすこと、恰も朝禮の如し。と書きたり。萬事はかの行くを主とし、荒ご



跟隨

自身旅館を訪ひ、黃門、豫て知り給ふ如く、秀吉今官位人臣を極め、兵威四海を席卷すといへども、もと松下某が草履とりて跟隨せし奴僕とは誰か知らざらんやうく、織田殿に見立てられ、武士の交を得たる身なれば、天下の諸侯陽に畏服するが如しといへども、心より實に歸順する者無し。今被官となりし者ども、元は同僚傍輩なれば、實の主君とは思はず。願はくは近日表立たしく對面申し、時に、其の心して給はるべし。秀吉に天下を取らせらるゝも、失はしめらるゝも、卿の御心一つにあり。此の事頼み奉りたくて、かく上洛をば勧めまゐらせたり。とて、家康の背をたゞき

被官

赤裸々  
眞率

たりといふ。家康も此の赤裸々に眞率なる白狀に對しては、たゞ依頼に應ずる外はあるべからず。他人ならば千里も迂廻して行く道を、太閤は極めて短き直線を取つて進む。禮儀も、作法も、遠慮も、人前も、彼が突進する脚下に蹂躪せらる。此の時にあたりて、赤心ありて權畧無く、裸體ありて衣粧無く、眞實ありて繩墨無し。規律に拘らず、早く埒の明くを旨とす。さやうにせんとて、わざと爲したりとて、人爲の跡見えて、却つて滑稽に類すれども、此の人は自然にかやうの大きなる性格を備へたれば、群雄も遂に其の下に屈したりしなり。

蹂躪

繩墨

(一)武將。毛利元就の子。慶長二年(二二五七)歿。年六十五。  
兵革

(二)美濃國の地理歴史に關する書。有賀友廣の著。

元龜、天正の時に當りて、天下は正に英雄に饑ゑたり。社會は其の中心を失ひしかば、何人か出でて泰平を開かんことを望みたり。されば、小早川隆景が、本朝の兵革頻りに動きてこゝに百餘年、天下の亂既に極りぬ。世また泰平に屬すべき期や、近きにあり。此の時に當つて自ら天下の權を握り、海内の亂を攘ふべき人などか無かるべき。といひたるは、此の崇拜心の渴望を正直に言表したるものなり。然るに、かゝる崇拜心の前に、秀吉といふ大きな人物現れたり。彼は自然に偉大なり。彼の前に出づれば、群雄は小兒の如し。老人物語に曰く、

(一)武將。蒲生氏郷。文祿四年(二二五五)歿。年四十。

(二)名は秀家。寛文二年(二二三二)歿。

風采

古今を曠しうす

太閤、氏郷を會津に封ず。後氏郷出仕す。太閤他事を問はずしていふ、汝手を能く書けり。謠の本を一番書いてくれよ。とて、紙硯を持參れと宣ふとぞ。また太閤或時宇喜多殿にて能を見物し給ふ。庭に下り給ふ時に、東照宮下りて、履を正しくし給ふ。太閤手を以て肩を押へて、徳川殿に履をなほさせ申すことよ。と宣ふ。

秀吉の風采は此の眞率なる傳説に盡きたり。人を人臭く思はず、恰も天の容れざる所無く、地の載せざる所無きが如し。諸豪は各自ら他人と短長を較するの意あり。獨り秀吉は眼古今を曠しうせり。天下是に

謳歌

於て、自ら彼を謳歌せざるを得ざりしなり。

—愛山文集—

一八 史傳を讀むべし 大町桂月

青年はいかなる書物を讀むべきかとの御問に對し、卑見左に申述候。

人は何人も摸擬性を有し居候。また感染性を有し居候。而して一生の中此の二性の最も熾なるは、少年時代若しくは青年時代に候。どちらかと申せば、摸擬性は少年の方が強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感染し、小人に接すれば小人に

卑見

感染し、豪傑に接すれば豪傑に感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、讀物の選擇もこれより割出さざるべからずと存候。

此の頃の青年の一般の缺點は、歴史傳記の知識に乏しき事に候。随つて今の青年は聖人、君子、英雄、豪傑、志士、仁人、大學者、大宗教家、忠臣、孝子などに接すると極めて少く、随つて自然人物が小さくなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申候。これ實に國家百年の大患に候。故に小生は大呼す、請ふ、大いに史傳を讀まれよと。

國家百年の大患

又一つ今の青年に通じたる缺點之あり候。そは個



重厚

人的若しくは孤立的といふ點に候。即ち前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考が餘りに強く候。随つて重厚雄大の氣風無くして、こせくちよこくする小人物が多く候。これも史傳と親しまぬより起ること候。史傳を讀めば、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり」といふことが、よく解り申すべく、行が自ら重厚になり申すべく、人物もどつしりとして参り申すべく候。

申すまでも之無く候へども、國家の盛衰興亡は全く人物の如何に之あり候。盛なる國も人物をければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申候。我

淨化

が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確信致候。人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くは無しと存候。聖賢の遺著は史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日々絶えず讀誦せられよ。さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香たかく、人の心を淨化致候へども、近時の文學は、動もすれば人を誤るもの多し。其の選擇には深き注意を要すべく候。

— 新學生訓 —

一九 夏の夜

土井 晚翠

はや黄昏の影寄せぬ。  
風おもむろに吹通ふ  
都大路の夏げしき。  
洗ひすてたる夕立の  
名残柳に玉とめて。  
大空高く月出でて、  
八百の街の隈もなく  
照す涼しき夏の夜や。

雲は静にをさまりて、  
残る稀なる星の影。

そゞろあるきに夜は更けて、  
袂は重し露深し。

月斜なる時計臺、  
二つの針の重なりて  
打つも高しや時の數。

傾きかゝる天の河。  
仰ぎて家路として行く

逍遙の群あともなし。  
ちまたのあるじ今はたゞ  
月の光と吹く風と。

— 曉鐘 —

二〇 橘少佐 其の一

田山 花袋

小笠原君から首山、遼陽の戦、殊に橘少佐の戦死の  
状況は詳しく聞いた。

小笠原君の語られるには、

「今度の戦争は、まあ例へて見れば、南山に大石橋の戦  
を混ぜて、それが幾日も續いたやうなもの。私は河南  
の観戦山で見てゐたが、毎日毎日敵壘を攻めては取

(一)名は周太。戦功によりて陸軍中佐となる。  
(二)首山堡。  
(三)滿洲奉天府の南十七里。戦は明治三十七年八月。

(四)滿洲盛京省金州附近。  
(五)同上。海城の南。  
(六)太子河の南。

狼穿

れずに日が暮れる。實にどうなることかと心細いほどでした。ですから首山一帯の山の取れた時は、それはそれは實際欣喜雀躍で、私などは第一に飛出して、何は措いてもまづ戦場へと出て行つて見たのでした。  
行つて見るに、首山一帯の敵の陣地の中でも、三四聯隊即ち橘少佐の戦死した聯隊の向つた山に、一番堅固な防備が出来てゐました。例の鐵條網、それに狼穿もありました。それが今までのとは違つて、深いことも深いし、其の穿の底に落ちると刺されると、鋭利な鐵棒が立て、ありました。實にそれは行届

いたものでした。

君も來る時、あの首山の麓の線路に沿うた所に一つの村落があつて、其の前に鐵條網が仕掛けてある。それから少し前に兵舎の半ば建築しかけた柱が、何かの防備か知らんと思はれるやうに立つてゐるのを見たでせう。あの附近が敵の激戦地で、第三十四聯隊は右を行く。第六師團の一部は左を行く。敵は又此の村落に據つて頑強に抵抗し、其のうしろに小さな池のある、其の向ふの小高い處に二三門の機關砲を据ゑて、滅茶々に撃ちかけるといふ有様。味方は其の附近でえらくやられたのです。私はまづ三十四聯

隊の突撃した丘から登つて見たが、敵の掩堡が二段に築かれてあつて、其の長い掩堡はまるで味方の死骸で埋められてゐるといつてもよい、實に見るに忍びない光景でした。

語りかけて小笠原君は言葉を止めた。其の時の凄惨な感じが胸に迫つて來て、後を續けることが出来ないといふ風であつた。

二一 橘少佐 其の二

小笠原君はやがてまた言葉を續けた。

「それに一番残念なのは橘少佐です。お互に宇品出

ゆくり無く  
邂逅す

發以來、少佐にはどんなに世話になつたか知れませ  
ん。君も知つてゐる通り、實際人格の大きかつた人で、  
あの位しつかりした人は軍人にも珍しい。私は其の  
翌日でしたが、例の池のある村落の方へ寫眞を撮り  
に行つて居たのですが、そこでゆくり無く邂逅した  
のが橘少佐の馬卒です。其の時ばかりは私は泣かず  
には居られなかつたのです。  
其の馬卒は橘少佐の遺骨と、其の奮闘した軍刀と  
を持つて此方へ來るところで、私が私の顔を見る  
や、いきなり泣出してしまひました。私もそれを見る  
と、いくぢ無く胸が塞がつて、どうしても言葉が出な

いのです。馬卒も馬卒で、涙を拭いて、黙つて其の軍刀  
を私に見せるのです。其の軍刀には、實に少佐の勇ま  
しい最後の光景が明らかに示されてありました。ま  
づ切先から二三寸ばかりは、まるで鋸の齒のやうに  
めちやく／＼につぶれて、血が夥しく乾いて粘りつい  
てゐましたが、鏢の處には彈丸の透つた痕が穴にな  
つて居ました。少佐は其の時きつと手に一彈を受け  
たに相違無いのです。ついそんなものを見てゐる中  
に、いろ／＼世話になつたことや、よく私等の室に來  
て、何も不便なことは無いかと言つてくれたことや、  
其の威嚴のある中に、一種小兒を懐かしがらせるや

うな所のあつたやさしい容貌や、何やかや潮のやうに集つて来て、思はず顔をそむけて泣かずには居られませんでした。

其の時馬卒の話すには、實に残念でした。私の漸く探して参つた頃には、少佐はもう瞑目なまつて、いくら動かしても動きませんでした。其の朝はいよ／＼突撃にお出でになるといふ時、私を呼んで、正午頃迄にはどんなことがあつてもあの山を占領するから、占領したことが分つたら、馬と晝飯とを持つて來いとの御命令でした。私はどうなることかしらん、もう取れさうなもの、味方の國旗が立ちさうなものと思

糧秣

つて見てゐましたが、十時、十一時になつても戦は止まない。其の中十二時近くなつて、ともかくも晝飯の用意もし、馬にも十分糧秣をやつて、いざと言へばすぐ行くばかりの支度をして待つてゐるうちに、一時も打ち、二時も過ぎ、三時になると段々味方のやられたことが分つて、旦那も負傷なされたのを内田軍曹が介抱して居られるのを見たといつて知らせた者がありました。それを聞くと私は始めて騒ぎ出して、馬も辨當も投り出して、あちこちと探し廻りました。到頭六時過までまご／＼して、探し出した頃には、もう御瞑目、實に残念で残念でたまりません。——から

言つておい／＼泣くので、私も胸が塞がるやうでした。本當に橘少佐は人望のあつた人で、誰でも其の精神のしつかりしてゐるのと、慈愛の深いのに、崇敬の心を起さない者は無かつたさうです。現に第三十四聯隊に赴任してからまだ一月と経たないのですが、全隊の士氣は忽ち振つたといふことです。

躬行實踐

(一)今上陛下。

小笠原君の言葉を聞いてゐる中に、嚴格な橘少佐の容貌が眼の前に見えるやうな心地がした。少佐は平生教育家を以て自ら任じ、躬行實踐を第一の主義として、思想の高潔なことは、實に古武士の風があつたといふことである。其の廉で選拔せられて、一時東

(一)八月廿一日。

宮殿下の御劍術を御指南申し上げた事もあつたさうであるが、少佐はそれを一生に得易からぬ榮譽と信じ、戦死する際にも、其の日が恰も東宮殿下の御誕生日であることを記憶して忘れず、畏くも御誕生日に戦死するのは、實に軍人としての本望であるが、此のおめでたい日に、多くの味方の兵を殺し、しかも一度占領した丘陵を敵に奪還されるのは、いかにも残念だと、死ぬまでそれを言つたさうである。

二二 我が暑中休暇 五十嵐 力

いつも若葉が薫る頃になると、始めてほつと蘇つ

た思がする。天も青い、地も青い、其の間に限り無い懐かしさがある。かくて快く夏休を迎へて、一年の疲を楽しく忘れるのである。

(一)大和國生駒郡。河内との國境。高さ二千百十二尺。  
 (二)和泉國一帯の海岸。  
 (三)大和、伊勢、紀伊の三國に跨る山。高さ四千五百尺。  
 (四)大和國吉野郡。熊野川の上流。  
 (五)大和、紀伊の國境。北山川の谿谷。  
 (六)紀伊國東牟婁郡。智山中にあり。直下八十丈と稱す。  
 (七)紀伊國牟婁郡一帯の海洋。

此の夏も先づ懐かしい故郷に歸つて、優しい生駒山の笑む所で、美しい茅渟の浦風に吹かれながら、暖い家庭の人となつた。こんな事もあつた、あんな事もあつたと、都の物語にはや世の塵を忘れてしまつた。やがて舊友と旅に出れば、斷雲迷ふ大臺ヶ原から十津川の奥に分入つて、或は高嶺の雲に枕を欹て、朽ちたる橋に膽を消し給うた大塔宮の後を慕ひ、神秘のこもる瀨八丁に浮び、那智の瀑布を見て、熊野洋の

荒浪を横切つた。旅衣を脱ぐと、すぐ母や弟や妹などと舞子の濱に行く。

磯の香を嗅いで、紫の淡路島や瀬戸の海、白帆の走るを友として、幾日は夢と過ぎた。また誘はれるまゝ、に家を出ては、奈良の都に二千年の夢をたづね、京都に入つては、加茂の清流、鞍馬の青黛に平安朝の昔を偲んで、しづかな風に吹かれつゝ、白河の里に花賣女の花を求め、比叡の山に登つては鏡の如き琵琶の海や、狭い京の街を見おろして、將門ならぬ身にも天下が、瀨田の夕照は見た。三井の鐘は旅窓に聽いて、粟津

(一)加茂川。京都市の東部を貫流す。  
 青黛  
 (二)山城國愛宕郡。京都市の北三里。  
 (三)京都市の北方郊外。比叡山南麓の村。  
 (四)(五)(六)(七)琵琶湖畔の名所。近江八景の内。



(一)(二)いづれも  
内江八景の

一葦の舟

が原も通る。唐崎<sup>(一)</sup>比良<sup>(二)</sup>それぐの眺を擅にして、やがて大湖の小波に漾ふ一葦の舟に身を託すれば、舟歌は軽く起つて、堅田<sup>(三)</sup>の堂を見つゝ、しづかに進むうち、程なく竹生島に着いて、瑠璃の波に浮んだ青螺のやうな仙島を踏むことが出来た。

かくて過ぎた七旬の休暇は實に短かつた。暑さも知らずにたゞ樂しかつた。最後にもう一度故郷に入ると、もはや六甲山<sup>(四)</sup>から秋風が吹いて、垣根には萩が咲いてゐた。かうして愉快な此の一夏は過ぎた。

(四)攝津國武庫有馬兩郡に跨がる山。高さ二九七〇尺。

二三 風と露

三 好學

一 風の音

草木が風を受けて、葉、枝又は莖を動かして一種の音を發したり、又風<sup>(一)</sup>に木の葉が慌しく飞舞ふ様などは、いかに面白<sup>(二)</sup>い眺である。秋の野の芒の風に戦ぎ、河邊、湖邊、海邊などで、萩、蘆、菰などが風を受けてざわざわ音のする時などは、至つて寂しい感情が起る。

秋の夕方、晴渡つた空に一點の雲も無く、又さしたる空氣の動搖も無いのに、森や林の梢で何と無く音がして、秋風の渡るを知らせることがある。彼の松韻、松籟などいふのも之と同じわけ、別段に強い風も吹かぬのに、松の梢では一種の音がする。之はやがて

松韻  
松籟

〔一〕氣露風梳  
柳髮水消波  
洗菴苔  
〔郡其香〕

空には多少の風のある事を示すのである。須磨、明石の海邊、又は東海道五十三次の松並木など、晴れた日の夕方又は月の冴えた夜に、高い梢の上で松風の音のするのは、自ら一種の趣がある。昔から松風の音が吟詠の材料に上つたのも尤もである。枝垂柳の風に靡く様を見ると、微風では多くの枝がそよ／＼と一緒<sup>(一)</sup>に動いて、「風新柳の髮を梳る」といふやうに、優雅な趣がある。然るに暴風になると、恰も狂ひ騒ぐ鬼女の髮のやうに、東に、西に、南に、北に舞狂ふ。亦一種の壯觀である。

竹藪の風を受ける工合も、多少これに似て居て、風

〔一〕歌人 鹿兒島  
年の殺。明治六  
年七十六

に逆らはずに動く所に趣味がある。歌人八田知紀はかやうに歌つてゐる、

吹く風になびきく／＼て争はぬ

こゝろや竹のみさをなるらん

二 露の色

露は夏草に下りるもので、朝早く起きて叢の間を見ると、葉に綺麗に着いて居る。殊に稻、蘆などのやうな禾本科の植物や、露<sup>つゆ</sup>やぶかうじなどの葉の縁には、小さい水玉が規則正しくのつて居る。又竹の葉の先にも、同じやうに綺麗な露の玉が宿る。

斯様に稻や竹の葉の先、又は露やぶかうじなどの

凝集

葉の縁に着く水玉は、空氣中の水分が凝集したのでは無く、植物體の中に澤山に溜つた水が、葉の縁又は先にある小さい孔から夜中外へ瀘しだされて出來たのである。植物の中から出る水は、何時でも葉の中の極つた部分に着くが、さうで無くて、葉の全面に銀色の小さい水玉が不規則に着いて居るのは、空氣中の水分から出來た眞の露である。

露に逢ふと、草が如何にも涼しさうに、且新鮮に見える。熱帶の沙漠のある地方では、雨は降らぬが、朝露が夥しく下りるから、植物がそれで水分を取ることが出来る。總べて露は夏の盛、晝間熱く、夜から明方に

かけて熱度の急に下る時に多く出來るもので、日中の熱さに萎れかゝつた葉や莖も、再び蘇つたやうになる。露は斯様に植物の生存上に大切な關係があるばかりで無く、朝な夕な、清新の美觀を夏草の上に與へるものである。

—植物生態美觀—

二四 歐洲の初航海 福地源一郎

文久元年十月、徳川幕府は竹内下野守、松平石見守、<sup>(一)</sup>京極能登守の三人を特命全權公使に任じ、歐洲の諸條約國に赴き、帝王に拜謁して、聘問の禮を修め、兼ねては<sup>(二)</sup>両都、<sup>(三)</sup>両港開市延期の談判を遂ぐべき旨を命じ、

(一)竹内保徳。  
(二)松平康道。  
(三)京極高朝。  
(四)英、佛、蘭、露、普、葡の六國。  
聘問の禮  
(五)江戸、大阪。  
(六)兵庫、新潟。

國書

諸國帝王への御國書及び全權委任狀をも、外國の例に倣ひて相渡されたり。

談柄

捧腹

出發の支度については、種々をかしき談柄どもありて、其の時すら捧腹に堪へざる程の事多かりき。通辯・翻譯に従事せる人々は、西洋は云々なればさる御用意には及ばずと、或は洋人に聞くところに據り、又は書籍にて讀むところを以て三使に申し立て、又小栗豊後守は米國に使せられたる實驗を引いて忠告に及びたれども、否々、米國はさもあらんが、歐洲は又格外ならんも知り難し。洋人の言ふところをうかと思ひて差支あらば、日本國の御耻辱なり」とて、容易に

(一)名は忠順。萬延元年米國に使す。

は従はれず。但し駕籠、持槍、甲冑、挾箱は無用なれば持參に及ばずと、非常の英斷を以て決したれども、三使だけは手槍及び鞍、鐙等の馬具を持參あるべしとて、持たせられたり。

それより筆、墨、紙等の用意に及び、食料の支度として、米は白米を御藏より受取り、醬油、香の物等は買上げとなし、味噌は腐敗し易き品なれば、通常の物にては其の虞あり、如何すべきと、會議區々なれば、我等は切に「御持參無用」と止めたれども、いかでか採用せらるべき。御手前が勤向の外の儀なれば、御黙りなさい。との一言に叱り附けられ、さあらば御評議次第に」と

區々

勤向



柴田貞太郎 京極能登守 竹内下野守 松平石見守

沈黙して、其の爲すところを見てあれば、其の頃長沼流の軍學者某といへる者の説に、「我が流儀には、甲州の信玄以來、軍用として萬年味噌の傳あり。此の傳にて練立てたる味噌ならば、赤道直下に於て太陽にあたるとも、決して腐敗の虞

(一)外國奉行組頭  
柴田貞太郎  
中。

(二)Hong Kong.  
(三)Singapore.

無しといへるを聞きて、「それ究竟なり、依頼せよ」と、組頭の指圖にて製造を命じ、中瓶數箇に詰めて持參したるに、氣の毒なるかな、此の萬年味噌は香港とシ<sup>(一)</sup>ンガポールとの間に於て早くも腐りて臭氣堪難く、乗船士官より苦情ありければ、瓶に入れたるまゝ、海中に投入れて、龍王に献上したりき。  
諸事皆かゝる情況なれば、純然たる日本風にて、文久元年十二月二十二日を以て品川沖より英國軍艦オージン號に乗込み、長崎にて石炭を積入れ、同じき二年正月元日の曉に長崎を出帆して香港に向ひたり。英國軍艦にては、特別の注意を以て一行を待遇し

煩苛

たれども、飲食は全く違ひ、衣服坐臥ともすべて軍艦の紀律に反對なれば、艦長、士官は日本使節の無作法なるに當惑して、其の少しく紀律を守らんことを望み、一行は又艦長、士官等が瑣細の事にて我等の動作に苦情を唱ふるを煩苛なりとして不平を鳴し、それがため、間に挿まりたる通辯、翻譯の諸人は、難澁を極めたり。但し三使の中にも、石見守は最も日本風を守られ、既に香港に於て、一行中の某等が洋靴を買求めて穿ちたるを見咎め、嚴に之を叱責し、國風を紊るを以てこれより日本に追返すべしとまでに言出したるが、某等が散々に謝罪して、漸く宥されたる程を

りき。かゝる心底なれば、三使及び一行も、西洋諸國巡回中少しも我が國の風俗を紊さず、羽織袴、大小、草履にて陣笠を冠り、巴里、倫敦の市中を遊歩するに更に耻づる色も無く、傲然として大小を横たへ、我こそ日本の武士なれといふ風體にて、大手を振つて歩きたりき。

—懷往事談—

## 二五 日本海の夕浪と北海の朝潮

内ヶ崎作三郎

旅といへば、一種の感想を起すのが常であるが、殊に海外に始めて出立たうとする時の思出は、又一種

格別のものである。忘れもせぬ五年前の九月四日の午後五時であつた。僕が乗込んだ露西亞義勇艦隊のリュームン號は、船荷を積終ると、大きな鈴を鳴すやら、汽笛を鳴すやらして敦賀の港を出帆した。午後一時頃までは雨と風とがあつて、少々波が立つたが、夕暮近くなつては、灣内靜になぎ渡つて、油を流したやうであつた。神戸からわざ／＼見送つてくれた一友人は、午前中に歸つたから、波止場にも何處にも見送人といふものは無い。宿屋の小僧が二三人佇んでゐるのみだ。名殘惜しい感じが少いだけ、却つてしあはせであつたかも知れぬ。

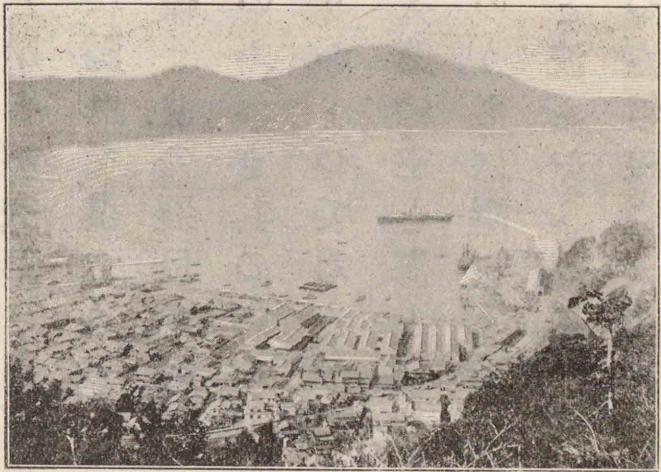
母國

いみじ

夕靄

船は靜に動き出した。僕は甲板に立つて、母國の山と岸とが次第に遠ざかり行くのを眺めた。夕日は雲に隠れて、其のうるはしい光を波に落さぬが、船尾に續く波の裂目の、碧玉の色とやいふべき、瑠璃色とやいふべき、其のいみじき色合に僕は見とれて、欄に倚りかゝつてゐた。一時間もさうしてゐる中、暮の色は次第に空と海とに被ひひろがつて、越の山々も夕靄のうちに隠れそめた。船は既に敦賀港の外に出ると、波もやゝ高くなつた。悲しい秋の夕風も肌寒くなつた。甲板の人々は皆船房に降りて、後に残つたのは僕たゞ一人、望と祈とに満ちた胸を籐椅子にもたせ

てゐるうち、波の船側をうつ音や、機關室の響などが、一緒に交つて聞える。それが子守唄でも聞いてゐるやうな心持で、いつか、うとうとした。半時間程して眼を開くと、四隣は全く眞暗で、たゞ波の尾が所々に白く見えるだけである。立上るとよろ／＼と揺れる。階段の欄干にすがつて、辛くも船房に降りたことであつた。



敦 賀 港

(Vladivostok) シベリヤ東南部の海港。敦賀を去る五百海里。

船に揺られること三十時間で浦鹽に着いた。それから汽車の中に虜になつてゐること二週日の後に、再び潮の香を嗅いだ。汽車から船に乗移つたのは、膚寒い夜中頃、凄じい習の北海の其の夜は、まことに穩かであつたのを喜んだ。港の電燈が水に揺れる。燈明臺の色射は電光の如く海上を走る。頗る壯快である。小寒いから寢臺が十二三はいつてゐる二等室に入つた。

翌曉になると、前後の船室の人々は早くも起出て、身仕度に忙しい。僕も起きて顔を洗ひ、それから小さい食堂へ行つて茶を飲んだ。もう午前六時頃で、薄墨



<sup>(1)</sup>Queenborough. 英國倫敦近くの港。  
<sup>(2)</sup>Union Jack.

色の室の隙間から、朝のけはひが洩れて来るやうである。<sup>(1)</sup>クインボロー港に近づくと、<sup>(2)</sup>ユニオン・ジャックの海軍旗を掲げた一隻の小砲艦が、勢よく浪を切つて進んで行く。空は段々白けて灰色となり、港の朝景色が靜に眼前に横たはつた。長い旅路の目的地に達したと思ふと、凱旋者のやうな心強い感が、胸の中に湧かざるを得なかつた。

<sup>(3)</sup>Lawestiff.

後十日程を経て、東海岸のローウエストフトの棧橋の上で、秋の朝の清く澄んだ大氣を十分に吸込んだ。同地は英國の最東端に位して居り、僕の立つたのは、其のまた最東端の棧橋の行詰りであるから、英國

<sup>(1)</sup>Homesick.

<sup>(2)</sup>Edinburgh. 蘇格蘭の都。

<sup>(3)</sup>Portobello.

包むに餘る

でも日本に一番近い部分に立つたのであつた。宿に歸つて此の話をすると、<sup>(1)</sup>思郷病を起さなかつたかなどと冷かされた。一兩年後、蘇國に旅した時、<sup>(2)</sup>エデンバラに近いポルトベロの濱で、再び北海の面影を眺めた。初春のこととて、夏に見るべき賑かさも華やかさも賞することが出来なかつたが、大海の姿に接した喜は、包むに餘る程であつた。

—白中黄記—

憤を起す

二六 學藝に志す者の訓 三浦梅園

今の人或は學に志し、或は藝に志す者、一旦憤を起し、晝夜を分たず、勉強勵むといへども、已に一月を經、

半月を過ぎ怠る心早く生じ、吾がつとめ至らざるとはいはで、性質の過に歸す。馬は疾しとて朝暫く走りて止まん、いかでか牛の終日歩まんには及ぶべき。谷間の石の磨け、井桁の圓くなるも、豈一朝一夕の力ならんや。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、而して後其の効あり。人一生の力を其の道に用ふるさへ、尙其の奥義に至るは易からず。況や、我が一月半月、乃至一年半年の勤を以て、他人一生の功に比せんとす。思はざるの甚だしきなり。昔李白書を匡山に讀む。漸く倦みて他行せし時、道に老人の石にあてて斧を磨るに逢ふ。之を問へば、針と爲すべきとて磨

奥義

(一)唐の大詩人。

(一)日本三蹟の一人。醍醐朱雀村上の三朝に仕ふ。康保三年(一六二〇)歿。年七十。

る。といひけるに感じて、勉めて書を読み、遂に其の名を成せりとぞ。小野道風は本朝名譽の能書なり。若かりし時、手を學べども進まざるに倦みて、後園に立休らひけるに、一匹の蛙の泉水のほとりの枝垂たる柳にとび上らんとしけれども届かざりけるが、次第次第に高く飛んで、後には遂に柳の枝に移りけり。道風之を看て藝の勉むるにあることを知り、學んでやまず、其の名今に高くなりぬ。

—梅園叢書—

二七 松坂の一夜

佐々木信綱

時は夏の半、「いやとこそ」と長閑やかに唄ひ連れぬ

く御伊勢參の群も、春先ほどには騒がしからぬ伊勢松坂なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に「御免」といつて腰をかけたのは、本居舜庵といふ魚町の年の若い小兒科醫であつた醫師を業とはしてゐるものの、名を宣長といつて、皇國學（ミヤクガク）の書（かみ）やら漢籍やらを常に買ふ此の店の花客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手をうつて「あゝ、残念なことをしなされた。あなたがよく名前を言つておいでになる江戸の岡部先生が、今の先、若いお弟子と供を連れてお立寄になつたに」と言ふ。舜庵は、いつものゆつくりした調子とは違つて、「先生がどうして此處へ」と、あ

花客

わたししく問ふ。

主人は「何でも田安様の御用で山城から大和とお廻りになつて、歸りに參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお着きになつたところ、少しお足に浮腫が出たとやらで御逗留、今朝はもうお宜しいので御出立の途中、何か古い本は無いかと暫くお休みになつて、參宮にお出かけになりました。舜庵「それは残念なことである、どうかしてお目にかゝりたいが、跡を追うてお出でなされませ、追付けませう」と主人がいふので、舜庵は一行の様子を大急ぎで聽取つて、跡を追うた。

湊町、平生町、愛宕町を通り過ぎ、松坂の市街を離れて、次の宿なる垣鼻村のさきまで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すごくと

我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衛士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松坂の本陣新上屋に宿つた。若し歸りにまた泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい」と頼んでおいた舜庵は、夜に入つて新上



賀茂真淵像

塔頭

屋からの使を得た。樹敬寺の塔頭なる嶺松院の歌會に往つて今しも歸つて來た彼は、取るものも取敢へ

ず旅宿を訪うた。



賀茂春海像

は仄暗い行燈の下に於て舜庵を引見した。

賀茂縣主真淵、通稱岡部衛士は當年六十七歳、其の

(一)八代將軍德川吉宗。

嘖々

大著なる冠辭考、萬葉考なども既に成り、將軍有徳公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、其の名嘖々たる一世の老大家である。年老いたれど、頗豊かなる此の老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に迸つてゐる才氣を温和な性格に包んでゐる。三十四歳の壯年。しかも彼は二十三歳にして京都に遊學して、醫術を學び、二十八歳にして松坂に歸つて、醫を業としてゐたが、京都ではたゞ醫術を學んだのみでなくて、契沖(二)の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面

讀破す  
蘊蓄

(二)學僧。徳川初世の國學者。元祿十四年(一七〇一)寂。年六十二。

欽慕

を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、其の計畫を語つた。老學者は若人の言を靜に聽いて、懇に其の意見を語つた。我も固より神典を解きあきらめんの志はあつたが、それにはまづ漢意(一)を清く離れて、古の眞の意(二)を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の言(三)を得た上でなければならぬ。古の言を得んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それゆゑ自分は専ら萬葉を明らめて居た間、かくも年老いて、殘の齡いくばくも無くなつてしまつた。御身は年盛りで、ゆくさきが長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成遂げられるであらう。しかし世の學に志す者は、とか

く低いところを経ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては低い處をさへ得ることが出来ぬのである。此の旨を忘れず心にしめて、まづ低いところをよく固めて、さて高い處に登るがよいと諭した。

面ほてり

夏の夜は早くも更けて、家々の門の皆とぎされ果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、さらでも今朝から曇り日の闇夜の道の、いづこを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側なる我が家の潜戸を這入つた。隣家なる桶利の主人は律義者で、いつも遅くまで夜なべをして居る。今夜

律義者

もとん／＼と桶の箍をいれてゐる。時にはやかまし  
いと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響  
かなかつた。

(一)眞淵の門人。  
坂大學の通  
稱。  
うけひごと

舜庵は其の後江戸に便を求め、翌十四年の正月、村  
田傳藏が中にはいつて名簿を捧げ、うけひごとをし  
るして、縣居の門人録に名を列ねる一人となつた。爾  
來松坂と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、此は答  
へた。門人とはいへ、其の相會うたことは僅かに一度  
唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日  
の夜、伊勢國飯高郡松坂中町なる新上屋の行燈の光

は、かく相語つた老學者と若人とを照した。しかも其の仄暗い燈火は、我が國文學史の上に不滅の光を放つて居るのである。

—賀茂真淵と本居宣長—

二八 人倫の歌

親子

藤原兼輔<sup>(一)</sup>

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道に惑ひぬるかな

大江千里<sup>(二)</sup>

秋の日は山の端近し暮れぬ間に

母にみえなんあゆめ我が駒

<sup>(一)</sup>平安朝の歌人。世に堤中納言といふ。承平三年(一一五三)卒。年五十七。

<sup>(二)</sup>平安朝の歌人。醍醐天皇の朝に仕ふ。

夫婦

伊藤仁齋<sup>(一)</sup>

縁子を見れば涙のかずそひて

ありしむかしぞいとど戀しき

兄弟

松平定信

埋火のあたりのどかにはらからの

まどるせし夜ぞ戀しかりける

朋友

平兼盛<sup>(二)</sup>

世の中に嬉しきものは思ふどち

はな見てくらす心なりけり

讀人しらず

思ふどちまどるせる夜は唐錦

<sup>(一)</sup>徳川時代の大儒。寶永二年(一三六五)歿。年七十九。

<sup>(二)</sup>平安朝の歌人。村上天皇の朝に仕ふ。

たゞまく惜しきものにぞありける

明倫歌集

二九 ナイヤガラの壯觀 黑板勝美

北米合衆國と英領加奈陀との境、平野遠く連るあたり、<sup>(一)</sup>オントリオ湖と<sup>(二)</sup>エリー湖とを通ずる<sup>(三)</sup>ナイヤガラ河に懸れる大瀑布の壯觀に至りては、實に水の奇絶怪絶なるものといはねばならぬ。毎年四方から集り來る遊覽の客が無慮七十萬人に上るといふのも、當然のことであらう。米人は此の天然を利用して四十萬馬力の水力發電所を設け、幾多都市の電燈、幾百

Ontario.  
Erie.  
Niagara.  
奇絶怪絶

無慮

縮寫す

哩の電氣鐵道等に供給し、且製造工業の原動力として盛に之を用ひてゐる。さればナイヤガラの一小市は、昔に米國の勝地として天下に名高いばかりで無く、又工業の一中心たらんとする勢になつて居る。是實に米國に於ける天然の大と人工の大とを縮寫したものといつてよい。

Prospect.

Goat.

ナイヤガラ停車場を出て馬車を<sup>(一)</sup>プロスペクト公園に驅れば、近く一千六十呎の廣さなる亞米利加瀧は、<sup>(二)</sup>ゴート島を隔て、廣さ三千呎の加奈陀瀧と並んでゐる。共に一百六十呎の高處から、さながら白簾を懸けたかのやう、漲り落ちる水量は實に一分間一千



氣宇

五百萬立方尺。兩崖の斷巖絶壁高く聳えたる間を流れ行く急流矢よりも速き處、觀客を滿載した小蒸氣船の上下するなど、氣宇が頓に大きくなるやうな、そして、ぞつと毛髮が豎つやうな、一種言ふに言はれぬ感を生ずる。

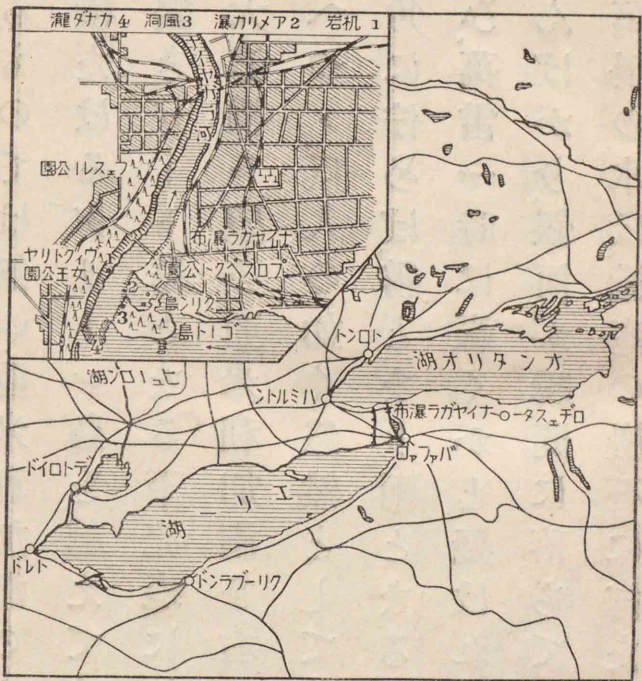


ナイヤガラ深布

Green.

併しながらナイヤガラの壯觀は此の遠望に盡きるものでは無い。亞米利加瀧の上、奔馬の如き急湍に横たはるグリーン島を越えてまた橋を渡れば、木立繁き、ゴート島となる。下流遙に架つた八百四十呎の大鐵橋を望み、亞米利加瀧を右に、加奈陀瀧を左に控へつゝ、巨人の如く悠然として其の間に在る島の一角に佇めば、霧となり雨となる飛沫に衣衿は忽ち濕ひ、萬雷一時に轟くかと疑はれる瀧の音に耳も聳せんばかり、銀河が瞬間に落ちて來るのかと思はれる萬斛の水は、瀧壺の巖石に打たれて水煙は高く蒸騰し、夕陽と相映じて中天に描き出す一條の長虹、いか

なる名手の筆を儼ひ來るも、此の壯と美とを併せ兼ねた絶景を寫すことはむづかしいであらう。ゴート島のすぐ傍に月島と稱する小さい岩島が横たはつて居る。月の夕月光に映ずる水煙から虹を生ずる奇觀により此の名を得たとのことであるが、ゴート島の奇觀は實



Windcave  
 鞞鞞  
 Table-rocks  
 渾然

に此の瀧壺のあたりに至つて窮るので、島の西端に沿ひ斷巖の麓へと小さい徑を辿り、下つて瀧壺の傍に出で、更に進めば、其の後には名高い風洞がある。一たび此の洞中に入れば、轟立した絶壁の間に凄然たる風の音、鞞鞞たる瀧の音、耳は遠くなる、眼は眩む、呼吸さへも止るやう。

舊路を傳はつて二たびゴート島の上に出で、漸く人心地のついた後、プロスペクト公園に馬車を驅つて、先に望んだ大鐵橋を渡つて加奈陀領に入り、<sup>(二)</sup>机岩の邊に至れば、數萬年の間落下した水力に、何時しか馬蹄鐵の形を成せる加奈陀瀧の渾然として雄大な

Queen  
Victoria.

る光景は、亞米利加瀧の遠く及ぶ所では無い。昇降機で瀧壺の後に出来る仕掛(一)、ヴィクトリヤ女皇公園の設備など、加奈陀も、此の勝景に對して出来るだけの力を盡して居る。

— 歐米文明記 —

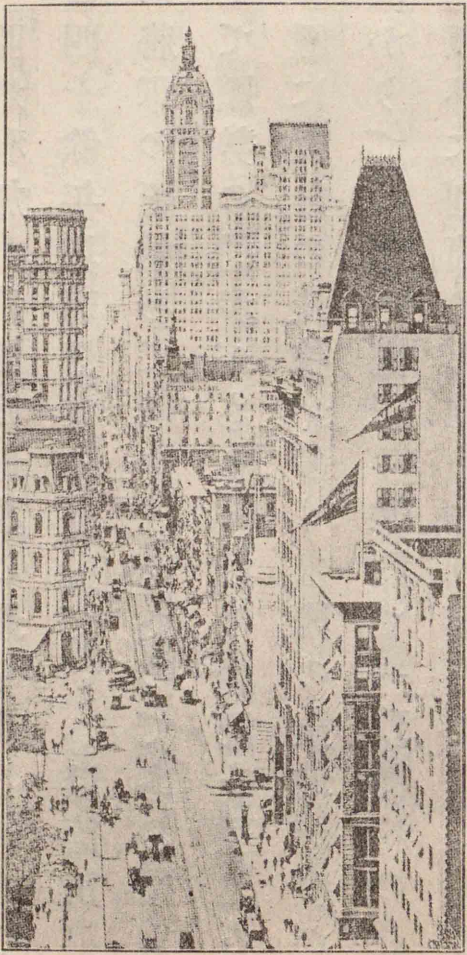
### 三〇 亞米利加人

ナイヤガラ(二)の瀑布は、米國人の世界第一と稱して誇つて居た所であるが、近頃の地理學者の説によると、それ以上の大瀑布が、亞弗利加に二つ(三)もあるとの事である。併し紐育の七百五十呎といふ摩天閣は、慥かに世界第一である。量に於ても、質に於ても、彼等亞

(一) ヴィクトリヤ  
瀑布とイグワ  
ッ瀑布。

理想  
金權

米利加人の理想とする所は、常に世界第一といふ事である。紐育の人口は五百萬、世界の金權を握るとい



紐育ロード—通

ふ點に於て、未だ倫敦の繁榮には

及ばないが、十數年ならずして、倫敦を凌いで世界第一の都とならうといふ覺悟で活動して居る。亞米利

加人が何事に於ても世界第一を理想とすることは感心の至である。

駭々  
天與の産物  
別箇

亞米利加合衆國は世界の最も新しい國で、今から百四十餘年以前、日本の歴史でいへば、徳川第十代家治將軍の頃、始めて國を成したのである。爾來駭々として國勢の進歩があり、今日の盛況を呈したのは、其の國に天與の産物が多く、未開の土地が多かつた爲ばかりでは無い。國民の鞏固な一致團結の意氣が、歐洲以外に別箇の天地を作り得たからである。

自由平等

し彼の國の長所は日本も亦之を學ばなければならぬ。米國人の長所はそもく、何ぞやといへば、余は其の自由平等の精神に在ると思ふ。

自由平等の精神、之を語其の儘で理解すれば、日本の國體に戻るやうに思はれる。されど、自由即ち非常な不自由である事に想到すれば、彼の國の發展の理由は了解せられる。凡そ眞の自由は不自由が根本である。自己の自由は他人の不自由である事を知れば、自由其のものに非常な制限が出来る。多くの人の自由な便利な方法を考へれば、結局自己は多少の不便を忍ばなければならぬ。大多數の人が便利と考へる

運動

以上は、自己の不便不利は之を忍ばなければならぬ。米國人の宗教運動、社會改良運動等、自己には如何なる不便があつても、一般國民の爲とあれば、直ちに之に賛成する。こゝに米國人の長所がある。自由と我儘との差別はこゝに認められる。私利を棄て、公益を思ふ一念が、米國をして今日あらしめたのである。

自覺

教育を受けた人士は、皆自ら國家の一員たることを考へなければならぬ。此の觀念が國民に普及してこそ、始めて普通教育の効果があるといはれるのである。米國民の勤勉奮勵は、皆此の教育の自覺から出たのである。

加味す

我等日本人は、今日の世界競争場裡に立つて、各國の長所を採つて、世界に優勝の地位を占めなければならぬ。米國民の長所はもとより、英、獨、佛、伊、それらの優所を捉へて、一方に偏してはならぬ。日本古來の道德を基本とし、これ等の最新の外來物を加味して、世界一になるといふ抱負で、一層の進歩を成遂げなければならぬ。國民は國家の目的に向つて、均しく一致しなければならぬ。

目的に副ふ

現時の大戦亂を見よ。交戦諸國はあらゆる事件を犠牲として、國家の共同目的に副はんとして、活動して居るのである。どこの國を見ても、舉國一致といふ

軽々に看過  
すべからず

警醒

烏合の衆

精神が充滿して居る。平和を愛する米國民が、獨國に對して宣戰して以來、少壯は争うて軍に赴き、富豪は競つて金圓を投ずるといふ舉國一致の態度は、世界の最舊邦たる日本が軽々に看過すべからざる所である。軍備の事はいふに及ばず、商業、工業すべて米國の大規模なるは、眞に其の理想に背かぬ。我が國民は眞に警醒しなればならぬ。

古來忠君愛國を誇とする日本人が、かねては烏合の衆なりと見てゐた米國人の自覺に對して、もしも劣る所があつたならば、こはいふまでも無く國民の耻辱である。國家の不面目である。

### 自讀文

#### 一 早春の曲

吉九一 昌

青ばみ初めし畑の麥生、

麥踏む人の影も見えて、

雲雀鳴くべき空や何時と、

待たれてたのし。今日此の頃や。

暖の柳はまだ寒く、

寒風吹けごも梅の花は

零れ咲きたり。鳥や鳴くと、

待たれてたのし。今日此の頃や。

## 二 生存競争

丘 淺次郎

地球上には各種の動植物をして自由に増加せしむべき餘地は無い。そこへ各種の動植物が多数の子を生むのであるから、互の間に劇しい競争の起るの  
は見易い道理ではあるが、其の有様を詳しく論ずるには、先づ諸生物の生活する有様から考へてかゝらなければならぬ。

動物の中には、獅子、虎、狐、狸のやうに肉を食ふものもあれば、牛、馬、羊、鹿のやうに草を食ふものもあるが、獅子、虎等の餌となるものは、やはり草を食ふ動物ゆゑ、動物の食物は、直接にか、間接にか、必ず植物より取る外はない。又海産の動物を見るに、三尺の魚は一尺の魚を食ひ、一尺の魚は三寸の魚を食ひ、三寸の魚は一寸の蟲を食ひ、一寸の蟲は三分の蟲を食ふといふやうな工合あひで、どれもこれも、皆肉食動物ばかりのやうであるが、最も小さな蟲類は、大洋の表面全體に浮いて生活する無限の微細藻類を餌にするから、此の場合にも、動物の根原はやはり植物界にある。

かくの如き有様ゆゑ、植物なしには草食動物は生きて居られず、草食動物な

しには肉食動物は生きて居られぬ。草を食はなければ生命が保てぬのが草食動物の天性であるから、草食動物を飼ふ人は、初から毎日若干の草を犠牲に供する積でなければならず。又他の動物を食はなければ生命が保てぬのが肉食動物の天性であるから、肉食動物を飼ふ人は、初から若干の動物を殺す覺悟でなければならぬ。草と草食動物と肉食動物とが相並んで、互に犯さず、共に生存して行くといふことは到底出来がたい。

昔印度の釋迦が山中で難行苦行なんぎやくをして居られる處へ、惡魔が試ために來た話がある。まづ鳩に化けて飛んで來て、お釋迦様今鷹が私を捕つて食はうと追つかけて來ます。どうぞあはれと思つてお助け下さい。といったので、釋迦はすぐに鳩を懷に入れて隠してやつた。處へまた惡魔がすぐに鷹に化けて飛んで來て、お釋迦様私は久しく物を食はず、非常に腹が減つて居ます。今追掛けて來た鳩を食はなければ、餓死するより外はありません。どうぞあはれと思つて今の鳩を出して下さい。といった。そこで、釋迦はごうしたらよからうと思案した後、自分の腿ひざの肉を少し殺取ころつて、之を鷹に與へ、遂に兩方を助けられたといふこと

慈悲忍辱  
物をあはれみ  
事にかんにん  
する。

である。苟も慈悲忍辱を旨とするものは、此の心掛でなければならぬといふ譬で、教訓としては最も妙であるが、實際鳩も鷹も一羽より外に無く、それを僅かに一日だけ助けるのならば、此の方法で差支はないが、總べての鳩と總べての鷹とを、両方ともに何時までも助けることは到底出来ぬ。幸ひ悪魔が再び鳩と鷹とに化けて来なかつたからよかつたやうなもの、若し根氣よく此の試を何回も繰返し、又鳩に化けて来て隠して貰ひ、又鷹に化けて来て腿の肉を殺いでもらつたならば、一度に半斤づつとしても、十回には五斤となつて今度は釋迦が死んでしまふ。

又長閑な春の日に、野外を散歩して見ると、草木の青々と茂り、花の美しく咲いて居る處に、蝶が面白さうに飛びまはり、小鳥が楽しさうに歌つて居る。詩人は之を詩に作り、畫家は之を繪にかいて、共に此の世の楽しさを賞めたゝへるが、之は極めて皮相な感で、少し丁寧に考へて見れば、世の中は決してそんなに無事平穩なものではない。鳥がかく歌つて居られるのは、今日までに數十萬の蟲を食殺した結果で、歌ひながらも、なほ蟲の命を取らうと探して居る。又蝶

皮相  
うはつつら。

風前の燈  
風にあふられ  
るともしび。

がかく舞つて居られるのも、幼蟲の頃に澤山の菜類を食ひからした結果である。而して彼處の樹の枝には、蝶を捕へて殺して食はうと、蜘蛛が網を張つて待つて居るし、此處の樹の頂上には、小鳥を捕へて殺して食はうと、鷹が鋭い目を張つて狙つて居るから、蝶の命も、小鳥の命も、殆ど風前の燈の如く、一つ油断すれば忽ち食殺されてしまふのである。なか／＼氣樂に遊んでばかり居られぬ。動植物は總べてかくの如く相殺し相食うて、自然界の平均を保つてゐるのである。

——進化論講話——

### 三 樂翁公の少時

三 上 參 次

樂翁公とは白河の城主松平定信をいふ。權中納言徳川宗武の第三子にて、八代將軍吉宗の孫なり。幼名は賢丸といひき。賢丸稟性虚弱にして、殊に幼稚の間は常に病がちなりしが、やうやく醫師灸藥の力にて成長したり。七歳の時始めて假名を習ひ、又始めて孝經を讀みたり。學問の師は大塚某とて、田安家の儒臣なりき。

稟性  
うまれつき。

(一)通稱大助。實  
名孝綽。



更なり  
もとより。

(一)支那の有名な史書。漢の武帝まで。の歴史。漢の司馬遷の撰。百三十卷。

(二)後漢十二帝の事を記した歴史。宋の范曄の撰。百二十卷。

(三)字は仲舉。後漢十一代靈帝に仕へて太傅といふ官まで進んだ人。

廓清 悪事を拂ひ清める。

(四)桓帝は十代。靈帝は十一代。十二代獻帝の時滅亡。

此の頃より、はや後年非凡の人となるべきしるし見えて、嬉戯のさまもなべての小兒の如くならず。いかで我が日本は更なり、唐土にも我が名を知られん程の偉業をなさばやと思ひ立ちしは、十歳の時なりけり。幼稚の心にもかく奮勵して、行を正しうし、學を勉めければ、十三歳の時、早くも自教鑑と題せる小冊子を綴りたり。之を父の卿に見せ參らせしに、卿も深く喜びて、褒美として一部(一)の史記を賜ひ、益之を勵(二)まされたり。

一日後漢書を読み、陳蕃が慨然として天下を廓清(三)せん(四)の志ありといへる處に至り、覺えずはたと手をうちて感歎に堪へざりきと。蓋し千歳の昔、しかも異域に同感の士を得たるを喜びたるなり。此の時徳川氏の天下は、未だ後漢の桓帝、靈帝(四)などの時のごとく亂離の極といふにはあらず。されども泰平年久しかりしかば、社會腐敗の兆は既に大いに現れたり。此の時に此の如き抱負の大なる人の出でしは、徳川氏の爲にいかばかりの幸運なりしぞ。

氣概は溢るゝばかりなるに、身體の健康之に伴なはざる人は、概ね性急なる者なり。賢丸はかゝる人の標本とぞいふべかりける。少しく意に満たぬ事あれば、烈火の如く怒り猛りて止る所を知らず。儒臣大塚又近侍の人々など、百方苦心して、或は婉曲に諷し、或は顔を干して直諫せしこと度重りければ、賢丸も漸く其の累徳を悟り、いたく自ら抑へて、遂に弱冠の頃には其の性行全く豹變するに至れり。己に克つは敵に克つよりも難し。能く克己の教に従ふこそ眞の勇といふべけれ。他日英名を天下に布くほどの者は、其の少き時に於ても、既にかく著しく他に異なる所あるを見る。

二十歳前後の勉強はた驚くべきものあり。朝は夙に起きて正格なる書を読み、午餐終れば又案に向ひて申の刻に至る。それよりは師に就いて、或は

婉曲 とほまはしにやさしく顔を干して。面と向つて。累徳 徳にわづらひする。弱冠 男子の二十歳。豹變 豹の皮の斑文のやうに鮮明に變る。

案 つくゑ。申の刻 今の午後四時頃。

鈔録 ぬきがき。稗史野乘 小説巷談通俗の史傳類。



松平定信

ば、烈火の如く怒り猛りて止る所を知らず。儒臣大塚又近侍の人々など、百方苦心して、或は婉曲に諷し、或は顔を干して直諫せしこと度重りければ、賢丸も漸く其の累徳を悟り、いたく自ら抑へて、遂に弱冠の頃には其の性行全く豹變するに至れり。己に克つは敵に克つよりも難し。能く克己の教に従ふこそ眞の勇といふべけれ。他日英名を天下に布くほどの者は、其の少き時に於ても、既にかく著しく他に異なる所あるを見る。

二十歳前後の勉強はた驚くべきものあり。朝は夙に起きて正格なる書を読み、午餐終れば又案に向ひて申の刻に至る。それよりは師に就いて、或は

蒲柳の質  
かば、やなぎ  
の類のやうに  
細く弱々しい  
體質。

攝生  
やうじやう。  
小心翼翼  
つゝいしみ深  
い。

(一)明日ありと  
思ふ心のあだ  
櫻、夜半に嵐  
の吹かぬもの  
かは。(親鸞  
上人)

(一)熱心の一念神  
明に通じ太  
形、王屋の二  
山を移し道を  
開き待たとい  
ふ假設談。列  
子に出づ。

もつさう  
飯を盛る器。  
搖籃  
子供を眠らせ  
る搖りかご。

空しく月日を送るは徒然に堪へず。謂へらく、予幼きより多病なれば、壽を保  
たんことおぼつかなし。大丈夫生を此の世に享けし上は、よしや蒲柳の質とは  
いへ、碌々として瓦礫と共に碎け、草木と共に朽ちなんこと口惜し。せめて予が  
生涯に成さんと誓ふことを、筆にだに残して家庭の訓どもせん。とて、乃ち病間  
に筆を執り、或は侍臣に口授して筆記せしめ、國本論、修身錄、政事錄などの諸書  
を著したり。而して其の虚弱なるを憂へ、攝生少しも怠なかりしより、思の外に  
年壽を保ちたりき。されどもなほ小心翼翼として、少しも養生の規律を紊さず。  
侍臣に向ひて、予幸にして稍健になりたれど、人生五十は到底望むべからず。蓋  
し四十年よりは長かるまじきかされば、其の前に人の爲す程の事は成しをへ  
て、人間の本分を盡したし。といへること屢なりき。

凡そ大人の事業を成せるを見るに、外より英氣の挫かるゝを防ぎ、内よりは  
心を勵まして尙幾年の養生を冀ひ、此の事を成就せんとの志望を抱ける者多  
きが如し。定信の主義は之に反し、決して明日あるを頼むな。今日のごとは今日  
成しとげよ。明日看んと楽しみみし櫻花の、夜半の嵐に散ること多きを見ずや。と

いへり。定信一代の事業は、皆此の決心の確乎たりしに由る。嗚呼立志なるかな、  
立志なるかな。志だに立たば、愚公は山をも移せり、成功豈期し難からんや。

——白河樂翁公と徳川時代——

#### 四 僕の故郷

徳富 蘆花

僕の故郷は九州、九州のちよつと真中で、海に遠い地方の幅一里、長さ三里と  
いふ、もつさうの底見た様な谷は僕の搖籃である。何方向いても雜木山がぐる  
りと屏風を立廻し、其の上から春は碧くなり、冬は白くなる。遠山が、ちよいちよ  
い顔を出して居る。最も高いのは東に一つ孤立した高鞍山で、誰がてつべんに  
乗りすてたのか、さながら鞍を置いたやう、雨が降る前には必ず此の山に霧が  
かゝり、此の山が見え出すと、如何やうに降つて居ても、やがて晴れる。雲がかゝ  
るのも、日が射すのも、先づ此の山が第一で、いはば僕の故郷の氣象臺だ。四方の  
山から滾々と湧出づる清水はたぎりよつて、村人のいはゆる大川、小川の二流  
となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田、其の田を無理におしつけて、此處

に村が一撮<sup>つまら</sup>彼處に家が二三十。北の隅にあるのが妻籠<sup>つまごめ</sup>の里といつて、先づ此の谷の都で、町といへば町、戸數は千に足らない。

取出していふほどでも無いが、今も忘れ難く思ふのは、水の清いのと、稻の美しいのである。たしか東京に積出して、<sup>すまい</sup>鯨米にするさうな。實に其の稻葉のつやつやと青んで、のび／＼と立揃つた所は、都人士に見せもしたい。實に見せたい、蛙の聲を踏分けて、一村總出の田植時、早少女<sup>さをとめ</sup>の白手拭がひらり／＼と風に靡いて、畦<sup>あぜ</sup>から畦に田植歌の流れる頃のにぎはひを、それから炎天の田草取は、傍で見てもつらいが、しかし夕立、暑い、たまらぬといふ下から／＼と鳴り出す。突然空氣が冷える。ふつと見ると、黒雲がもう高鞍山を七分通り呑んで居る。それがインキの散るやうに、すうと満天ににじんで来る。稻妻がきらり、夥しい雷鳴二つ三つ、冷たい風がさつと吹いて来る。やがて大粒の雨がぼつり、耳を掩うた太郎作がまだ半町と逃延びぬ中に、鳴る、光る、降る、吹く、世の終かと思ふ程の荒れやうと思へば、忽ちすうつと明るくなつて、やんだやうだ。と出す顔へ、あがりぎはの白雨二筋、三筋、笠おつ取つて出て見るころは、夕立は最早五六町逃

げのびて、隣村はさながら簾<sup>すだれ</sup>ごしになつて居る。

大空を眞二つに割つて、東の方はまだ眞暗雷様がごろ／＼太鼓を敲いて居るが、西の方はあか／＼と夕日がさして、高鞍山のとつべんと思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹が立つて居る。嗚呼涼しい。先程まで萎<sup>ひ</sup>えしをれて居つた稻が、たつた一瞬<sup>しゆん</sup>の間に、眼も醒める程あを／＼となつて、一二寸も伸びたやうに、どこを見てもざわ／＼とさゝめいては露を揺<sup>ゆ</sup>りこぼして居る。獨り泡だつ田の水は、ごく／＼溢れて、小鮒<sup>こぶち</sup>や鱒<sup>とちやう</sup>がやたらに畔路<sup>あぜみち</sup>にはねて居る。

蟲送も濟んで、初秋の風をよ／＼と稻葉に音づれる頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稻の花の美しさ。二百十日、二百二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊敷いた谷間がいつしか金色に照つて、此處にもざわ／＼、其處にもざわ／＼、収穫のさかりになれば、誰を訪<sup>たづ</sup>ねても家には居ない。皆田に出て居る。時雨が降出すと、夜晩くまで靱<sup>た</sup>すりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻が、最早綺麗な米俵になつて、倉や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓打つて豊年を祝ふのである。

——思出の記——

蟲送  
田畑の作物に  
ついた害虫を  
ふ被祭。

(一)徳川氏中世の儒者。備前岡山藩士。號を常山といふ。天明元年(一四四一)歿。年七十四。  
 (二)和泉國の都會。大阪の南三里。茅渚の海に臨み古き貿易港の一。

### 五 曾呂利新左衛門

湯淺元禎

(一) 堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤汝の姓名は何と申すぞと問ひけるに、其の者の對ふるやう、臣が姓名は即ち曾呂利新左衛門と申候。太閤はて奇なる姓もあるものかな。して其の曾呂利と申す姓には、何ぞいはれにてもあるか。と問はせけるに、又答ふるやう、聊かいはれもこれあり候。別にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くして曾呂利と入り、敢へて問へず。こゝを以て曾呂利と申候。太閤之は奇なり。又折節來るべし。といはる。

他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、汝の姓名は何と申せしな。答へて曰く、曾呂利々々々、新左衛門々々々々。太閤怪しみて其の重言を尋ねけるに、新左衛門の答ふるやう、殿下先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に従ひ、同じく重言を以て答へ候より。

新左衛門或時太閤に對ひ、願はくは一日御耳の匂を嗅がせられたし。とありければ、太閤いぶかしく思ひ、こやつ又何をかなすらん。と疑ひしが、何はともあれ宜し、汝がよきに嗅げ。と許されしかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、

呆然  
あきれたま

太閤の耳元に口寄せて何やら言ふの體なれば、皆々心中密に驚き、かやつ何をいふらんか。若しや我を讒言するにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつが云ふこと、御用ひあらんも測られず。と憂へ、おのゝ自邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調べて、密に曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集ひければ、太閤の御前に出で謝していへるやう、殿下のお耳を拜借し、其の香ばしき匂を嗅ぎたる功德によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて、殆ど坐するの餘席これなく候。これ全く殿下の御耳の効能なり。とありければ、太閤も亦呆然として愕きけるごなん。

又或日の事なりしが、新左衛門太閤の機嫌を取り、頗る其の功ありしかば、太閤何なりと汝の望めるものを賜はせん。とありけるに、新左衛門のいへるやう、「臣敢へて大なる望もこれなく候。唯紙袋二箇程米を賜はりたし。太閤そはいいと易き事なり。餘り慾すくなの至ならずや。と仰せありけるに、新左衛門これにて澤山なり。と申して退出せしが、やがて二箇の紙袋を張抜き、數十百人を雇

### 五 曾呂利新左衛門

(一)下關と釜山の  
間海路百二十  
二哩。晝夜二  
回の連絡船で  
十一時間半。  
(二)阿波の徳島か

ひ來り、太閤の御前に出で、前日御約束の米これに賜はりたし。」と米倉二戸前を蓋ひたりけるにぞ、さすがの太閤もこれには呆れて、暫し言句もなかりけり。  
又或時太閤數多金銀の蟹を造らせ、之を庭の泉水に放ちて娛樂としけるが、程經て見あきたりとして、近習の者に、何ぞ一用をいひ出づる者に之を與へんと申されけるに、皆々大いに悦び、臣は之を紙押になさんといひ、或は臣は金の茶釜の蓋も持たねば、せめて之を其の蓋の把手になさんといひ、何といひ、彼といひて一箇づつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、臣は人の相撲も既に見厭きし事なれば、此の蟹を集へて、相撲を致させんと存するなり。」といひければ、太閤「相撲とありては、五箇や十箇にては興薄かるべし。悉く持行くべし。」とて、残れる蟹を皆與へられけり。其の頓才實に驚くべく、奇とすべし。——常山紀談——

### 六 古代の朝鮮と日本人

萩野 由之

(一) 下關から夜船で出れば、未だ本國の夢の覺めぬうちに、釜山の波止場に着く。  
朝鮮に行くのは徳島から高知へ行くよりも便利である。維新以前鎖國の時代

ら土佐の高知  
まで、四國の  
表と裏ながら  
時間は長くか  
かる。  
一衣帶水  
帯ほどの細い  
水。

(一)朝鮮慶尙北  
道。新羅の舊  
都。

には、唐、天竺の次に朝鮮といつて、地獄、極樂の近邊でもあるかのやうに思つたものだが、それは昔の夢で、今では一衣帶水の海峡を踰えれば、目の前に兀々たる朝鮮の禿山が吾を迎へる。今の日本人は世界を狭しとする大度胸になつたのだ。しかし維新前の人々は朝鮮を海外と思つて、徳川將軍の代がはり毎に朝鮮から公使が慶賀を申しに來る時は、江戸滞在中でも、途中でも、皆珍しがつて、學者は其の旅館へ參つて詩を贈答する。朝鮮人に詩でも作つてもらへば、鬼の首でも取つたやうに名譽として喜んだものだ。それほど朝鮮人を珍しがつたが、ずつと遡つて古代の日本人になると、今の人と同じやうに、朝鮮をば隣村のやうに思つて、朝飯前にでも出掛けようといふ勢であつた。

神代といへば紀元前、今から三千年の前で、文明も進まず、航海も不便な時である。其の時代に既に天照大神の御弟素盞鳴尊は其の子五十猛命をつれて新羅へ渡航された。又素盞鳴尊の子の大國主神は出雲に居て、そこへ對岸の新羅人を呼寄せて居住させた事もある。今日でも慶州の迎日郡附近には、島根縣人が澤山移住して殖民をしてゐる。其の航海には木造の小さな和船の押切りで、

### 六 古代の朝鮮と日本人

(一)文武天皇元年  
から桓武天皇  
延暦十年まで  
の漢文體の歴  
史。  
後裔  
子孫。

すんく渡海をするといふ有様だから、昔もそんな工合であつたに相違ない。朝鮮の歴史によると、新羅の初の時代に、日本人が彼の土地へ渡海して、大臣になつてゐたといふ傳説もあるから、農民、漁民のみではなく、立派な人も澤山行つたに相違ない。又先方からも澤山日本へ歸化した證據も多い。大國主神の時代に新羅の王子といふ天日槍あめのひやりが來て、大國主神に歸服して、但馬の國に住居し、その一豪族となつた。神功皇后の御母方は即ち天日槍の子孫である。神功皇后の征韓は、此の母方の家の勢力をも借りられたのであらうと思はれる。さて、征韓以後には、半島の大部分が日本の勢力範圍となつて、盛に移住民を奨勵し、歓迎したので、彼の土人の日本に移住した者が甚だ多い。其の子孫には立派な武將も出來た。學者も出來た。續日本紀といふ歴史の編纂の總裁をした菅野真道すがのまみちといふ人も、蝦夷征伐の大功臣たる坂上田村麿も、又延喜の頃の學者で菅原道真公と張合つた三善清行みやよしのきよゆきも、南朝の忠臣兒島高德も、皆それである。尤も移住者は純朝鮮人のみではない。支那から朝鮮へ來て居た人が、又移住して來たのも多いから、其の中には支那人の後裔も多分にあるのである。

模倣  
まね。

右の如く、昔は半島は屬國であり、其の人民は互に往來したものだ。天智天皇の頃、屬國の縁が切れてからは、半島は日本と交通することが少くなつた。國民の往來は多少あつても、昔のやうではない。日本も文化を支那から直輸入して、朝鮮には重きを置かぬ。朝鮮其の時は新羅前の新羅は三韓の中の新羅、これは一統した新羅といつたが、これも支那の政治を模倣まねして、日本には朝貢しない。其の後は双方共に交際をもせぬやうになつた。朝鮮は日本と手を切つてから、新羅は高麗となり、高麗が亡びて近頃の朝鮮となつた。度々革命はあつたが、いつもく支那を師をして崇拜してゐたから、國號は改つても、其の政治は改らない。いつまでも日本の平安朝時代の末と全く同じやうな有様で、一向に進歩しなかつたのである。——讀史の趣味——

七 箱根神社祈願の記

大町 桂月

明治四十五年の夏、われ箱根山下の湯本村にありて、聖上陛下御重病の飛報に接し、夢かさばかり打驚きぬ。此の飛報は瞬またたくひまに山又山を越え、海の外ま

でも傳はりて、一團の愁雲忽ち東海の空を掩へり。六千萬の同胞、誰か憂懼に堪へざるものあらんや。村の在郷軍人會の人々、山上の箱根神社に詣でて御平癒の祈禱をなすと聞き、われも乞ひて其の一行に加る。

(一)箱根舊道途中の平場。

午後五時、會長泉澤少尉の家を發す。會せしもの五六人なりしが、行く／＼一人加り、二人加り、臺の茶屋に至りて待合はす程に、二十餘人となりぬ。石を敷きつめたる舊街道を上る。普通二三十人も山路を上るとすれば、必ずや脚健なる

落伍者  
列に後れる人。

者は早く進み、脚弱き者は遙に後れて、ちり／＼ばら／＼になるべけれど、さすがに軍隊教育を受けし人達なるだけに、歩調一致し、わざ／＼號令せずとも自ら一團となり、急進者もなければ落伍者もなし。須雲川に至れば、來り加る者

(二)湯本村の内。箱根舊道に沿うた村落の名。

一人あり。村民各戸前に立出で、一行に向つて「御苦勞様」と挨拶す。畑宿に至れば

(三)同上。

二三人加る。こゝも一行に挨拶すること須雲川の如し。老平に至り甘酒茶屋に

(五)箱根蘆の湖にそつた町の名。

休息する程に、日全く暮れたり。思ひがけずも杜宇一聲聞ゆ。聲せし方を仰げば、二子の一峰暮色の中に淡く見えて、高く天を衝く。二度とは啼かざりき。

(六)蘆の湖。

権現坂を下りて、元箱根に至り、一同湖水に手を洗ひ、面を洗ひ、口を漱ぎて身を清む。嬉しや湖上ばつと明らかになりて、半輪の月雲間に露る。離宮のある塔

(一)蘆の湖の南岸に在り。

ケ島、四山の中に最も黒く見ゆ。恰も巨人の臥すが如し。湖水は眠りて、ざぶとの

(二)蘆の湖の近くにある四山。

音だにもなし。嗚呼此の月は我等の祈願の光明ぞとばかりに感せられ、遙に離宮の空に向つて伏拜む。此の離宮建ちてより數十年、鸞駕一たびも到らず。聖上

鸞駕  
天子の御のりもの。

陛下日夜國の爲民の爲に盡瘁せさせられて、避暑、遊覽の御暇だにあらせず、箱根離宮建ちたる儘にて、一度だに目のあたり御覽せられしこと無きの一

事にても、聖徳の一斑を仰ぐべし。而してこれ此の度の御病の一因となりたるにあらずやと思はるゝにつけても、日本の臣民誰か感涙に咽ばざらんや。

蕭森  
しんとしてさびしい。

提灯の光をたよりに、老杉の中の石段を上る。夜氣蕭森として、神聖の地殊に

月魄

一層神聖なるを覺ゆ。石段を上り盡し唐門の外に立ちて、神官の來るを待つ。あたりは物暗けれど、杉の木立の隙間より仰いで月魄を見る。さきに湖畔にて

見しより一層さわやかなるに、いよ／＼祈願は成就するなりと、心何となく躍る。石段の下より提灯の光見え初め、暫くして、からん／＼と下駄の音聞え初め、又暫くして始めて登り果てたり。これ神官なり。一同神官に導かれて拜殿に上

り、こゝにて神官に被ひ清められて、内陣深く進み入り、神官の後に跪く。蠟燭の光微かにして、壇上の様よくは見えず。唯神官の右に偉大なる太鼓ありと見る程もなく、ごんと一聲天地の寂寞を破り、大祝の祝詞を讀む聲之に和して起る。鼓聲急にして、祝詞の聲も急なり。さびたる聲にて力あり。人をして自ら肅然たらしむ。次に一同の姓名を讀上げて、御平癒祈願の詞を陳ぶ。意到り情盡して、有難しとも有難し。一同拍手頓首し、一々神酒を頂戴して退く。

湖畔に來りて天を仰げば、曩の明月ははや雲に隠れて、天地全く暗黒なり。心許無く思はれて、胸に動悸の波うちしは、我のみにもあらざりしならん。

改訂帝國讀本卷三終

通用字及び正字對照表

(茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

刃	函	凡	凡	滅	涼	準	准	况	決	冒	田	兔	免	佞	伊	兩	通用正
刃	函	凡	凡	滅	涼	準	准	况	決	冒	圓	兔	免	佞	伊	兩	通用正
回	噴	器	唇	叙	収	双	廡	厨	即	卑	勺	効	劔	劔	剪	通用正	
回	噴	器	唇	叙	収	雙	廡	厨	即	卑	勺	効	劔	劔	剪	通用正	
懺	懃	恒	往	廻	廩	并	帽	尅	寶	寇	冤	塚	塚	場	場	通用正	
懺	懃	恆	往	廻	廩	并	帽	剋	寶	寇	冤	冢	冢	場	場	通用正	
桿	朽	史	晋	昂	既	整	携	捏	插	拔	拏	拘	戲	戲	戟	通用正	
桿	朽	史	晋	昂	既	整	攜	捏	插	拔	拏	拘	戲	戲	戟	通用正	
猷	貓	猪	猿	熔	焔	潛	潤	涅	氷	毒	殺	殲	欸	楸	楸	通用正	
猷	貓	猪	猿	熔	焔	潛	潤	涅	氷	毒	殺	殲	欸	楸	楸	通用正	
穎	稟	碍	砲	盜	蓋	盃	盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	獵	通用正	
穎	稟	礙	砲	盜	蓋	盃	盃	鼓	癡	略	畱	畫	瑣	玄	獵	通用正	
働	俟	京	亡	並	萬			織	紀	穀	粘	籤	纂	豎	竊	秘	願
働	埃	京	亾	並	萬			織	紀	穀	黏	籤	纂	豎	竊	祕	願
廝	廁	勅	冲	富	冊	同	膝	膝	腸	脈	胆	聒	耻	羣	罰	纏	纏
廝	廁	敕	冲	富	冊	字	膝	腸	脈	膽	聒	恥	羣	羣	罰	纏	纏
妍	妊	野	坂	嚙	叶	表	衛	衛	蛩	萌	莽	艷	館	舖	阜	致	臥
妍	妊	野	坂	嚙	叶	もよしにて	衛	衛	蛩	萌	莽	艷	館	舖	阜	致	臥
峯	峩	岳	婚	娉	姊		豹	豹	象	讎	讎	讎	讎	讎	讎	褒	裏
峰	峨	嶽	婚	聘	姊		豹	象	讎	讎	讎	讎	讎	讎	讎	褒	裏
微	強	弊	弊	庵	嶋		鎖	鎖	鐵	針	釜	隣	輒	軟	贗	贊	賓
微	強	弊	弊	庵	嶋		鎖	鐵	針	釜	鄰	輒	輒	輒	贗	贊	賓
村	普	考	慙	慙	忘		鶴	鶴	鬱	鬪	麵	馱	隸	隙	隔	隔	間
邨	普	攷	慙	慙	忘		鶴	鬱	鬪	麩	馱	隸	隸	隙	隔	隔	間

附録



柿	梃	案	基	棕	楫	槁	概	朴
梯	枇	椈	棋	椶	楫	槁	概	朴
毘	枇	汚	温	烟	無	狸	狸	略
砧	砧	稿	温	烟	无	狸	狸	略
砧	砧	稿	温	烟	无	狸	狸	略
網	網	總	線	縹	縹	縹	縹	縹
網	網	總	線	縹	縹	縹	縹	縹
荒	荒	蔭	枉	訛	譁	谿	蹤	踪
荒	荒	蔭	枉	訛	譁	谿	蹤	踪
蹠	蹠	遁	銜	鏤	雁	雞	駟	駟
蹠	蹠	遁	銜	鏤	雁	雞	駟	駟

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中\*標ヲ附シタル文字ニ限り、慣用ニ從ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ。

體ヘ体ホ巨ク互コ

ヲタル。「連互」  
桓ニ同シ。  
笨ニ同シ。アラシ、麗、粗。  
カラダ。

壺フ壺フ姫キ姫キ託タ託タ擔タ擔タ改ク改ク鎗ク鎗ク欠ケ欠ケ糸セ糸セ絲シ

ツボ。  
ミチ、宮中ノミチ。  
ツ、シム。  
ヒメ。  
拓ニ同シ。オス、ヒラク。  
ヨル、タノム、ユダメ、カコツク。  
ハラフ。又アガ。  
ニナフ、カツク。  
鬼ヲ追フトイフ星ノ神。  
アラタム。  
ヤリ。  
鏑ニ同シ。鏑ノ聲ノ形容。  
アクビ。「欠伸」  
カク。「缺席」  
ホソイト、細絲。  
イト。

但タ但タ借チ借チ胃ケ胃ケ協ケ協ケ刺シ刺シ台ダイ台ダイ后ゴ后ゴ商シ商シ

タレシ、タレ。「但馬」  
ツタナシ、拙劣。  
ミダリガハシ、猥。  
身分ヲ越エテオゴル。「僭越」  
カブト、兜。「甲冑」  
ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑」  
カナフ、叶。  
オビヤカス、脅。  
サス。「刺殺。刺客。名刺」  
モトル、ソムク、乖戾。「亞刺比亞」  
星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」  
ウテナ、ダイ。  
ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。  
キミ。「皇后」  
アキナヒ。  
モト、本。

羨セン羨セン蟲チュウ蟲チュウ託タ託タ詔シヨ詔シヨ證シヨ證シヨ豐ホリ豐ホリ迄キツ迄キツ選セン選セン撰セン

支那ノ地名。  
ウラヤム。  
魚介類ノ總稱。又ママシ。  
シム。  
ワビ、ワブ。「詔狀」  
詔ニ同シ。アザムク。  
ヘツラフ。  
ウタガフ、疑。  
アカシ、シルシ。「證明」  
イサム、諫。  
禮ノ古字。  
ユタカ。  
マデ。  
ユク、行。  
エラブ。(ヨリトル)  
エラブ。(書物ヲ編纂ス)

<sup>キ</sup>卻 <sup>グ</sup>卻  
ヒ、イ、隙。  
リソク。「退卻」  
キタノ、「鍛鍊」  
シコロ、

宛 字 (左の如き字は假名を  
使用するをよしとす)

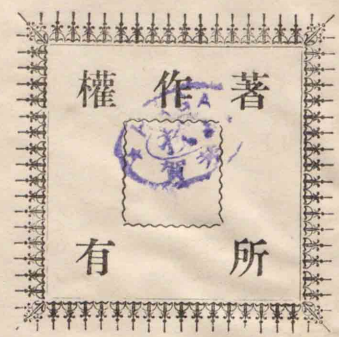
おぼつかなし 覺束なし  
 かひ(證の意  
の場合) 甲斐  
 きつと 屹度  
 さすが 流石、道  
 しまふ 仕舞ふ  
 だけ 丈  
 だめ 駄目  
 ちやうど 丁度  
 ちよつと 一寸、鳥渡  
 でたらめ 出鱈目

とうく 到頭  
 とかく 兎角、左右  
 とて、とても 迎  
 とにかく 兎に角  
 なかく 中々、却々  
 ふるまひ 振舞  
 はかなし 果敢なし  
 ほんたう 本當  
 むだ 無駄  
 むづかし 六ケし  
 やたら 矢鱈  
 やはり 矢張

附 録 終

大 大 大 大 大 大  
正 正 正 正 正 正

大 大 大 大 大 大  
 正 正 正 正 正 正  
 七 七 七 七 七 七  
 年 年 年 年 年 年  
 十 十 十 十 十 十  
 二 二 二 二 二 二  
 月 月 月 月 月 月  
 十 十 十 十 十 十  
 四 四 四 四 四 四  
 日 日 日 日 日 日  
 改 改 改 改 改 改  
 訂 訂 訂 訂 訂 訂  
 三 三 三 三 三 三  
 版 版 版 版 版 版  
 發 發 發 發 發 發  
 行 行 行 行 行 行



著 者 芳 賀 矢 一

發 行 者 兼 合 資 會 社 富 山 房

代 表 者 合 資 會 社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 所 合 資 會 社 電 新 堂

發 行 所

東 京 市 神 田 區 裏 神 保 町 九 番 地

合 資 會 社 富 山 房

長 電 話 本 局 一 〇 三 六 本 局 四 一 三 〇 番 振 替 口 座 東 京 〇 五 一 番

改 訂 帝 國 讀 本

價 定	卷 一、二 各 金 參 拾 八 錢	卷 三、四 各 金 參 拾 六 錢	自 卷 五 各 金 參 拾 錢
-----	-------------------	-------------------	-----------------

